

## 中国地方の在来犁

河野 通明

### 目 次

はじめに

1. 在来犁の県別データと在来犁分布
2. 政府モデル系・朝鮮系要素の検出
3. 在来犁から見た中国地方の歴史
4. 日本のなかの中国地方

おわりに

### はじめに

本稿は旧山陽道・山陰道，すなわち中国5県に兵庫県の播磨・淡路と京都府の丹波・丹後地方を加えた7府県＝広義の中国地方の在来犁150台の調査データを公開し，そこから歴史情報を引き出して6～7世紀段階の山陽道・山陰道の動向を復原しようとするものである。広域にした理由は農学者の犁研究は現地調査をしておらず，民俗学系の民具研究は地域の民具の聞き取り調査が中心で，中国地方7県の在来犁のデータ収集は学界初の試みであり，それだけで意味をもつことに加えて，広域比較すれば1県だけで見ているは見えない歴史情報が引き出せるからである。これまで大化改新政府の長床犁導入政策の復原（河野2004）に続いて，在来犁を朝鮮系無床犁か政府モデル犁系長床犁か両者の混血型に分ける「新3分法」（河野2007，2010b）を提起したが，中国地方はそれらがもっとも典型的に表れる地域であり，地域ごとの多様な6～7世紀史の復原が期待できる。また広域比較は調査先の皆さんにとっても自館の資料が中国地方の犁耕文化のなかでどんな歴史的価値を持っているかを広い視野のなかで把握してもらえる機会となろう。

〔図1〕〔図2〕の一覧表は県別の調査履歴で，広域調査とはいっても域内の全域調査ができていくわけではなく，島根県はまだ3ヵ所というほとんど空白状態で県単位の粗密の差は大きいですが，完璧を期そうとすると先延ばしになって発表の機を逸するおそれもあるので，現時点のデータでとりあえずの分析結果を報告することにした。〔図2〕は調査で確認できた在来犁数を地図に示したものである。平成の大合併で市町村は大型化したがるが，分布図を描く際にはドットが粗くなり精度が落ちる。そこで本稿では分布図の精細度を維持するという研究目的から合併前の市町村名，資料館名で通した。この点，調査先各位にはご理解いただきたい。

図 1 中国地方の在来隼調査

山 口 県		島 根 県		鳥 取 県	
1982.12.10	防府天満宮	1993.2.21	安来市民俗資料館	1983.11.8	倉吉博物館・齋江家・香川家
1989.9.20	光市文化センター	2001.3.18	出雲民芸館	2001.3.16	泊村歴史民俗資料館
1989.9.21	美和町二ツ野 耕谷氏宅	2001.3.19	和鋼博物館		北條町歴史民俗資料館
	美和町歴史民俗資料館	広 島 県		2001.3.17	米子市立山陰歴史館
	本郷町歴史民俗資料館			1989.3.30	帝釈峽歴史民俗資料館
	鹿野町公民館	1989.3.31	因島市史料館	2008.8.26	鳥取県立博物館
1989.9.22	平生町教育委員会	1989.12.3	広島県立みよし風土記の丘・歴史民俗資料館		佐治歴史民俗資料館 ①
	大島町歴史民俗資料館		毛利博物館		用瀬町郷土歴史館
	久賀町歴史民俗資料館	1999.6.3	毛利博物館	2008.8.27	鳥取県埋文センター 青谷調査室
1989.12.1	徳地町教育委員会	1999.6.4	広島県立歴史博物館		旧東伯町民俗資料館
	山口市歴史民俗資料館		日本はきもの博物館		琴浦町歴史民俗資料館
	小郡町公民館	1999.6.5	福山城博物館		大山町上前谷の捨て墓
1989.12.2	美祢市歴史民俗資料館	1999.9.9	セリエ戸河内		江府町歴史民俗資料館
	小野田市歴史民俗資料館		吉和村民俗資料館		日野町歴史民俗資料館 ①
1989.12.3	川上村	1999.9.10	芸北町立民俗博物館	2008.8.28	佐治歴史民俗資料館 ②
	阿武川歴史民俗資料館	1999.9.11	八千代町土師民俗資料館		河原歴史民俗資料館
2005.3.21	岩国学校教育資料館 ①		高宮町民具収蔵庫	2008.8.29	泊歴史民俗資料館
	岩国市民具収蔵庫	1999.12.9	久井町歴史民俗資料館		日野町歴史民俗資料館 ②
2005.3.22	周東町 祖生公民館	1999.12.10	口和町郷土資料館	2008.8.30	倉吉博物館
	玖珂町社会教育課		世羅町民俗資料館	岡 山 県	
	玖珂町民具収蔵庫	1999.12.11	甲山町八田原民俗資料館		
2005.3.23	本郷村教育委員会		世羅西町郷土資料館	2010.2.3	高梁市郷土資料館
	本郷村歴史民俗資料館		世羅西町・牛博労働取り		岡山県立吉備路郷土館
	美和町歴史民俗資料館	1999.12.12	庄原市歴史民俗資料館	2010.2.4	井原市立星の郷民具伝承館
2005.3.24	光市文化センター		大田庄資料館		赤磐市吉井郷土資料館
	岩国学校教育資料館 ②		上下町農村文化資料館	2010.2.5	瀬戸内市牛窓民俗文化資料館
2005.6.23	室積海岸 地形観察	2000.3.20	日本はきもの博物館		瀬戸内市立邑久郷土資料館
	普賢寺	2000.3.21	三原歴史民俗資料館		備前市歴史民俗資料館
	光ふるさと郷土館	2000.3.22	瀬戸田町歴史民俗資料館	2010.2.6	政田民俗資料館
	平生町民具館		大山祇神社 海事博物館		青少年農林文化センター三徳園
2005.6.24	周東町祖生民俗資料館	2000.3.23	府中市歴史民俗資料館	2010.7.7	北房ふるさとセンター
	由宇町歴史民俗資料館		府中市・明郷小・広谷小・南小収蔵庫		真庭市北房公民館収蔵庫
	橋町民俗資料館		新市町歴史民俗資料館		真庭市目木構収蔵庫
	久賀町歴史民俗資料館	2000.3.24	安芸津町郷土資料室		蒜山郷土館
2006.3.15	和木町民俗資料館		竹原市教育委員会収蔵庫	2010.7.8	富教育歴史資料館
	和木町教育委員会		竹原市歴史民俗資料館		鏡野町文化資源保存伝習館
	田布施町郷土館	2000.3.25	神石町歴史民俗資料館		鏡野郷土博物館
2006.3.16	橋総合センター		神辺町歴史民俗資料館		旧鏡野歴史資料館(収蔵庫)
	橋町民俗資料館	2000.4.13	広島歴史民俗資料館	2010.7.9	倉敷市歴史民俗資料館
	周防大島教委大島教育支所		広島市郷土資料館		倉敷市福田歴史民俗資料館
	大島歴史民俗資料館		広島県埋蔵文化財センター		倉敷市玉島歴史民俗海洋資料館
2006.3.17	柳井市しらかべ学遊館	2000.4.14	佐伯町歴史民俗資料館		倉敷市真備歴史民俗資料館
	柳井市民具収蔵庫		府中町歴史民俗資料館		倉敷市民俗資料収蔵庫
	平生町歴史民俗資料館		府中町公民館収蔵庫	2010.7.10	吉備中央町加茂川歴史民俗資料館
	平生町民具収蔵庫	2000.4.15	三和町歴史民俗資料館		津山弥生の里文化財センター
	平生町教育委員会	2000.4.16	福山市山野民俗資料館		英田歴史民俗資料館
2006.3.18	周防大島文化交流センター		福山市田尻民俗資料館	2010.7.11	岡山市瀬戸町郷土館
	旧東和町民具収蔵庫	2000.5.20	日本はきもの博物館		赤磐市山陽郷土資料館
2006.3.19	田布施町郷土館				赤磐市山陽産業会館
					和気町歴史民俗資料館
					和気町田原井堰資料館

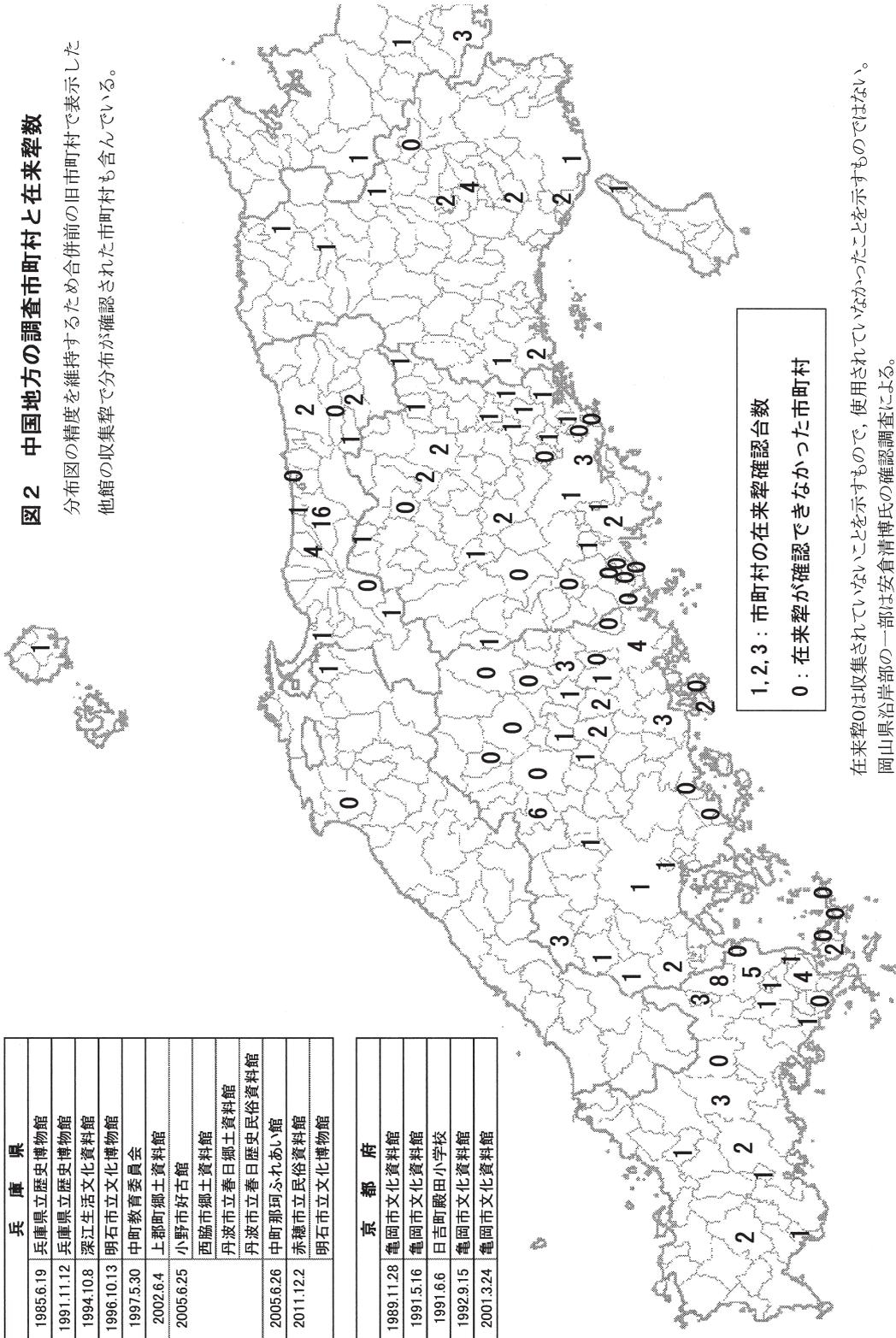
山口県の2005-6年調査は神奈川大学21世紀COEプログラムの一環、

広島県の1999-2000年調査は福武学術文化振興財団の助成、

鳥取県の2008年調査と岡山県の2010年7月調査は神奈川大学日本常民文化研究所の「瀬戸内海の歴史民俗研究」プロジェクトの一環である。

図2 中国地方の調査市町村と在来犁数

分布図の精度を維持するため合併前の旧市町村で表示した  
他館の収集犁で分布が確認された市町村も含んでいる。



兵庫 県	
1985.6.19	兵庫県立歴史博物館
1991.11.12	兵庫県立歴史博物館
1994.10.8	深江生活文化資料館
1996.10.13	明石市立文化博物館
1997.5.30	中町教育委員会
2002.6.4	上郡町郷土資料館
2005.6.25	小野市好古館
	西脇市郷土資料館
	丹波市立春日郷土資料館
	丹波市立春日歴史民俗資料館
2005.6.26	中町那珂ふれあい館
2011.12.2	赤穂市立民俗資料館
	明石市立文化博物館

京都 府	
1989.11.28	亀岡市文化資料館
1991.5.16	亀岡市文化資料館
1991.6.6	日吉町殿田小学校
1992.9.15	亀岡市文化資料館
2001.3.24	亀岡市文化資料館

1, 2, 3 : 市町村の在来犁確認台数  
0 : 在来犁が確認できなかった市町村

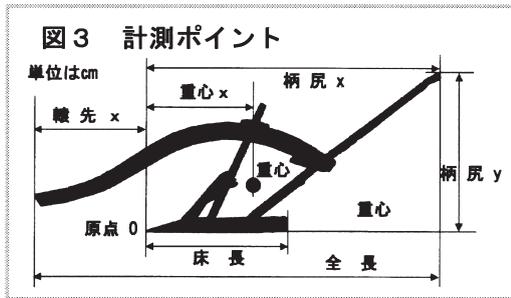
在来犁0は収集されていないことを示すもので、使用されていないかかったことを示すものではない。  
岡山県沿岸部の一部は安倉清博氏の確認調査による。

## 1. 在来犁の県別データと在来犁分布

横書き論文の流れに合わせて西から東、北から南を原則に県別の調査データを公開しよう。

### 1-1 山口県

〔図4〕は山口県の在来犁と計測表で、計測値は必要最小限のものに限った。日本では5世紀後半～6世紀に渡来人が牛と朝鮮系犁を持ち込み、その後、大化改新政府が中国系長床犁の実物模型を各地に送って普及を図った。その結果、朝鮮系犁を使っていた地域では政府モデル犁との混血型が生まれる。No.1～5, 15, 21～25, 27, 28はその混血型なのに対して残りは政府モデル犁の後裔で、ここには渡来人は来ていなかったことになる。



◆重量kg × 重心Xcm ÷ 100 = 復元力kgm

犁は地中の刃先に土の抵抗を受けるので、犁体は前のめりに倒れ込もうとする。ところが復元力が5kgmもあると、前のめりの力を押さえ込んで犁は自動的に定姿勢走行する。長床犁が安定性が高いのは、復元力が大きいからである。

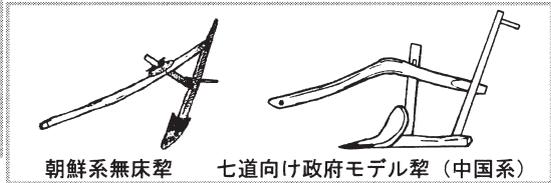
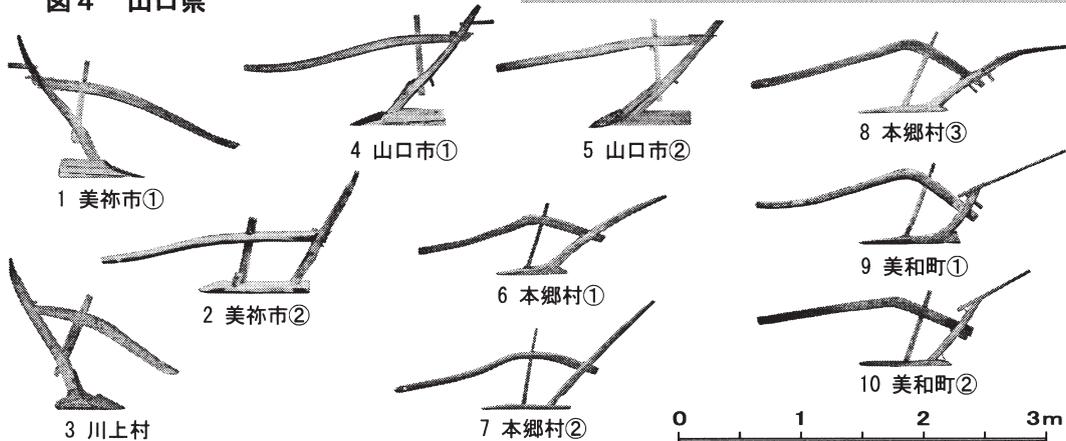
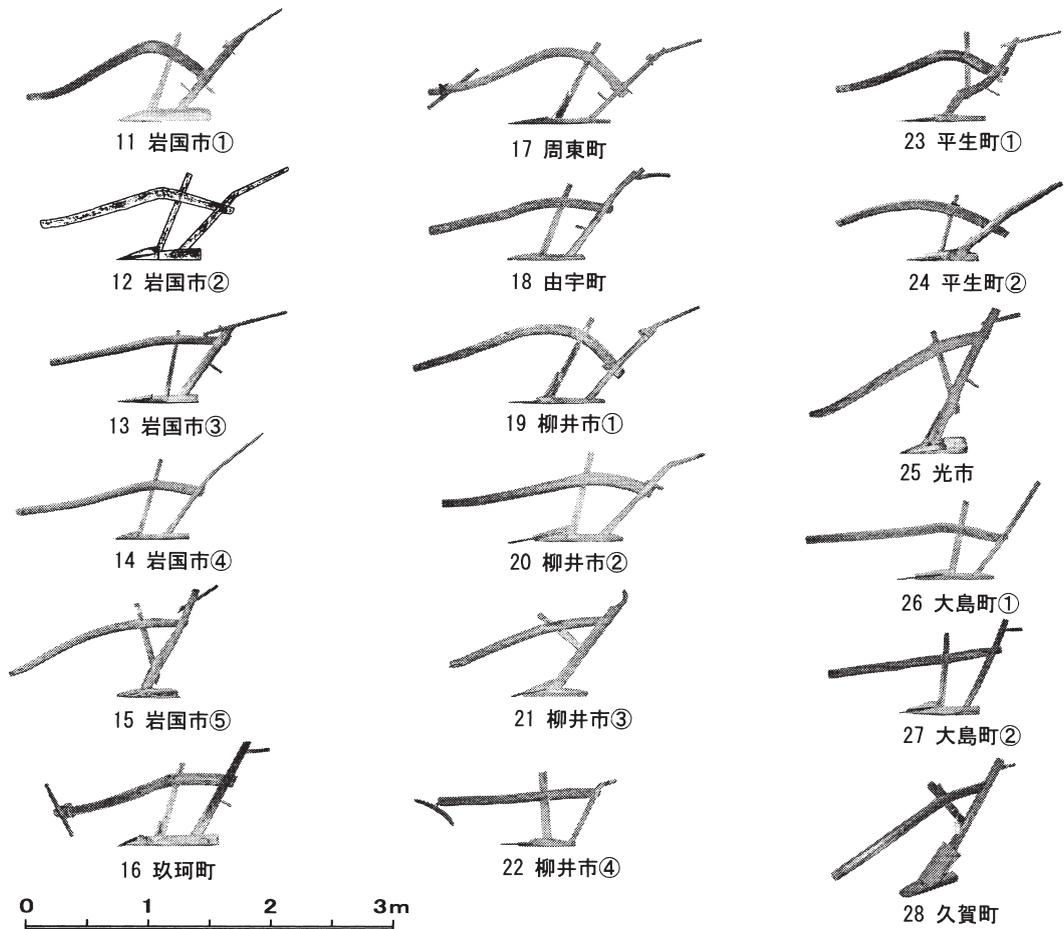


図4 山口県



No	市町村 収蔵施設	轆先 x	犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心 x	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
1	美祢市歴史民俗資料館①									
2	美祢市歴史民俗資料館② パネル写真									
3	川上村阿武川歴史民俗資料館									
4	山口市歴史民俗資料館①	87.0	77.0		115.5	85.5	202.5			
5	山口市歴史民俗資料館② 下小鯖									
6	本郷村歴史民俗資料館①	65.0		59.5	140.5	63.5	205.5	6.5	35.5	2.3
7	本郷村歴史民俗資料館②	70.4		72.5	145.0	90.5	215.4			
8	本郷村歴史民俗資料館③	77.0		71.5	185.5	56.5	262.5			
9	美和町① ニッ野 耕谷氏宅	83.0		84.0	170.0	75.0	253.0	6.8		
10	美和町② 歴史民俗資料館	83.0		72.5	141.5	77.5	224.5			



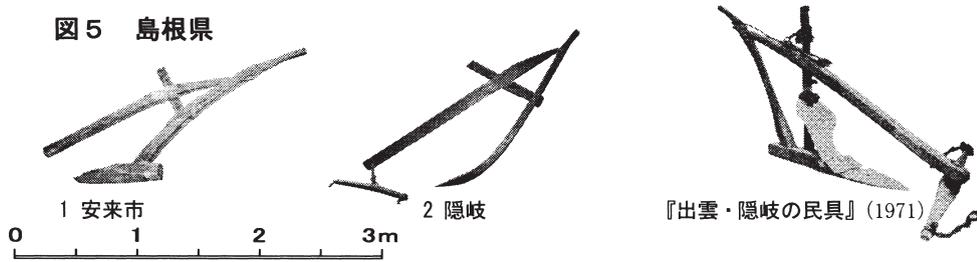
No.	市町村 収蔵施設	轅先 x	犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心 x	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
11	岩国市① 学校教育資料館	78.3			132.3	91.0	210.6	13.4	33.5	4.5
12	岩国市② 収蔵庫	64.0	70.0		141.8	76.2	205.8	8.3	36.0	3.0
13	岩国市③ 収蔵庫	55.8	68.8		141.7	75.3	197.5			
14	岩国市④ 収蔵庫	78.0		61.6	125.0	87.0	203.0	6.0	27.5	1.7
15	岩国市⑤ 収蔵庫	91.0		52.8	79.0	95.5	170.0			
16	玖珂町民具収蔵庫	57.0	84.5		127.5		184.5	13.3	40.5	5.4
17	周東祖生民俗資料館	65.1	70.5		159.0	71.5	224.1	12.1	40.0	4.8
18	由宇町歴史民俗資料館	64.0		67.4	135.8	74.0	199.8	9.0	36.0	3.2
19	柳井市民具収蔵庫①	80.0		78.8	159.5	77.8	239.5	10.0	44.0	4.4
20	柳井市民具収蔵庫② 日積宮ヶ峠	53.3	91.3		160.0	68.8	213.3	12.7	50.8	6.5
21	柳井市民具収蔵庫③ 日積鷹之巣	48.0	63.3		97.5	87.3	145.5	10.0	17.5	1.8
22	柳井市民具収蔵庫④	50.3	60.0		93.5	56.0	143.8			
23	平生町① 民具館	47.7	71.8		135.0	71.0	182.7	10.0	45.3	4.5
24	平生町② 収蔵庫	58.0	59.5		126.3	68.0	184.3	8.3	33.6	2.8
25	光市歴史民俗資料館	69.0		49.8	104.5	88.0	173.5	7.5	13.8	1.0
26	大島町歴史民俗資料館①	69.8	79.0		119.5	79.3	189.3	8.0	38.7	3.1
27	大島町歴史民俗資料館②	56.3	66.4		104.0	71.8	160.3	8.8	32.7	2.9
28	久賀町歴史民俗資料館									

美和町では他に6台、徳地町3、小郡町1、小野田市1台確認したが、首木調査で時間がなく在来犁は撮影・計測できず。

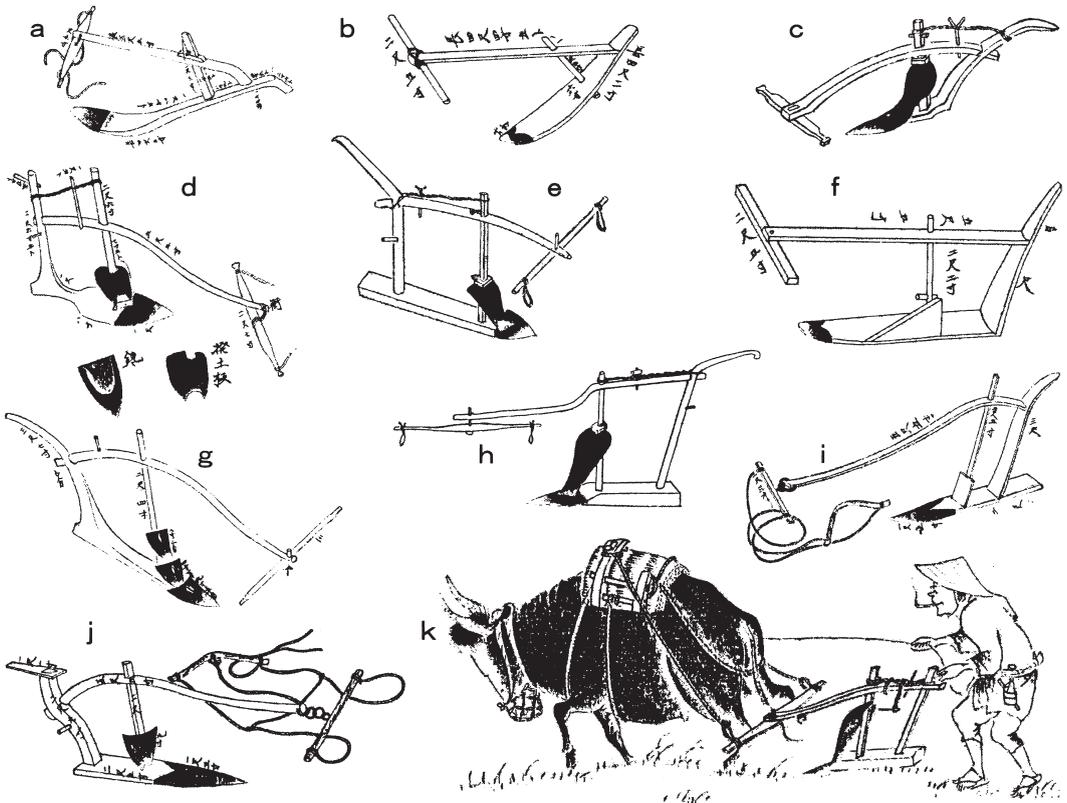
1-2 島根県

〔図5〕は島根県の在来犁と計測表で、ほとんど未調査なので明治13年の『島根県内農具図解』から犁図を集成して掲げた。当時の島根県はいまの鳥取県も含んでいたが、『農具図解』には使用地の記載がなく区別はできない。しかしながら島根・鳥取県域にはじつに多様な在来犁が使われていたことは確認できる。No.2の隠岐犁と『農具図解』のa, bは朝鮮系無床犁で、政府モデル犁の影響のないことから、百済・高句麗難民かその後の漂着民の持ち込みであろう。

図5 島根県



No	市町村 収蔵施設	轆先 x	犁床長		柄尻		全長	重量	重心 x	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
1	安来市民俗資料館									
2	隠岐(生研機構資料館)	41.5	0.0		85.0	90.0	126.5	6.8	33.0	2.2



『島根県内農具図解』の犁(島根大学附属図書館)

日本への犁耕の伝来の最新学説(「民具からの歴史学」から分かったこと)

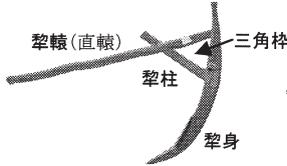
◆農具には遺伝子がある

これまで各地の農具の形が違うのは地形や土質の違いに合わせて改良を重ねた結果と信じられてきたが、じつは大間違いで、福岡平野と奈良盆地の犁の形の違いは、福岡は朝鮮系犁、奈良は中国系犁という系譜の違いだった。この背景には歴史の違いがあり、在来犁は地域の歴史を遺伝情報として伝えていることが分かってきた。

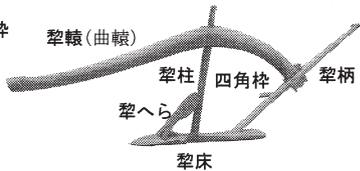
また犁は壊れると元の形で更新されるので、千年を超えても形は継承されることも分かってきた。

そこでこれを逆手に取って在来犁の広域比較から市町村ごとの古代史を復原するのが「民具からの歴史学」である。

◆朝鮮犁と中国犁



朝鮮系犁(福岡県)



中国系犁(奈良県)

朝鮮系犁は犁轅・犁柱・犁身の3部材を組み合わせた三角杵の無床犁。

中国系犁は犁轅・犁柱・犁床・犁柄の4部材を組み合わせた四角杵長床犁。

◆犁耕伝来の3段階

日本への犁耕の伝来は、右の表のように3段階に整理できる。

- ① 5世紀後半から6世紀にかけて、渡来人が各地に牛と無床犁を持ち込んだ。
- ② 7世紀後半の662～3年、大化改新政府は中国系の政府モデル長床犁を各地の評督に送りつけ、コピーさせて普及をはかった。
- ③ 663年の百済滅亡、668年の高句麗滅亡の難民は、入植地で朝鮮系無床犁を使った。

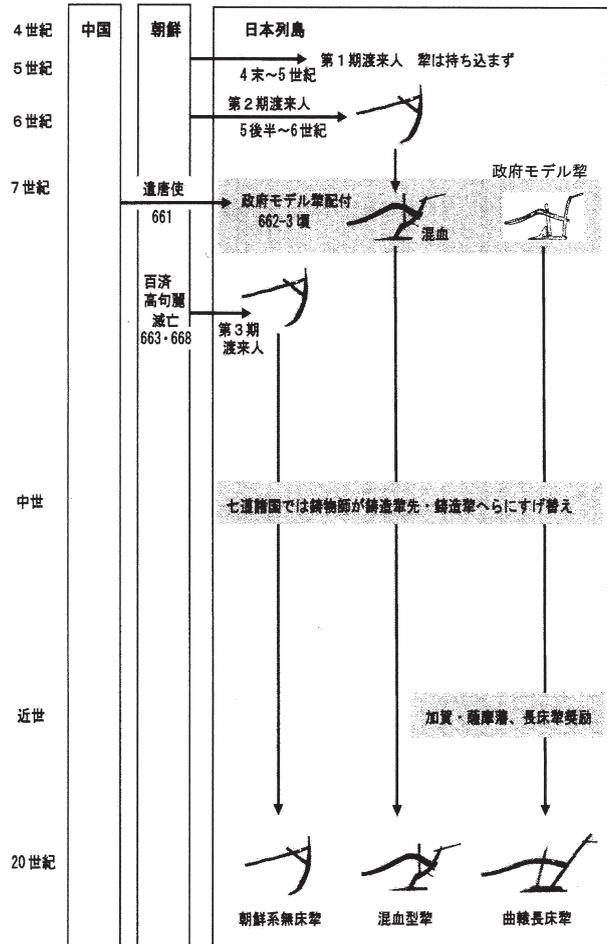
◆犁の3分法と新3分法

伝統的3分法	新3分法
・無床犁	・朝鮮系無床犁
・短床犁	・中国系長床犁 (政府モデル犁)
・長床犁	・朝鮮系・中国系 の混血型

伝統的3分法は耕深性能に注目した農学者の分類で、長らく使われてきた。

新3分法は犁が使われなくなり、博物館で地域の歴史の語り部になった現実に合わせて、犁型から歴史を引き出すために開発した新時代の分類法である。

ここから、混血型のあるところは5～6世紀に渡来人が来ていた地域、政府モデル犁のあるところは渡来人が来ていなかった地域、朝鮮系無床犁のあるところは百済・高句麗難民の入植地という、「犁型から地域古代史を読み解く公式」が導き出せる。

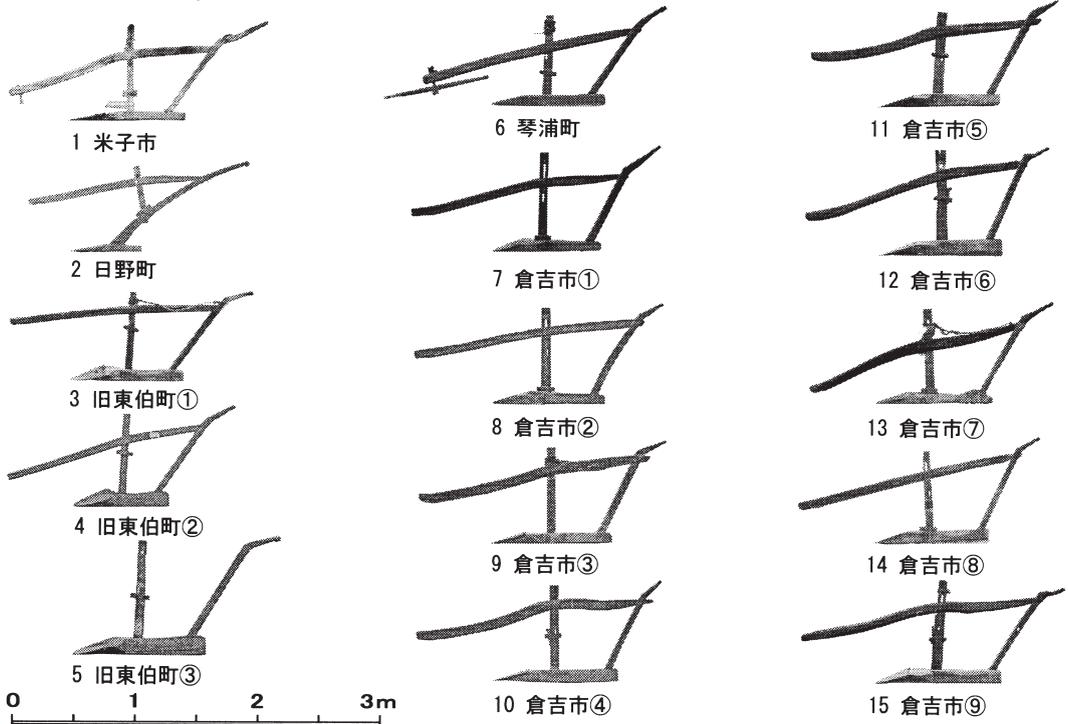


・犁は660年代に原型が決まって以降は、基本的には形を変えていない。  
 ・各地の犁型が多様なのは、地形や土質に適応したためではなく、混血型が実に多様なためである。

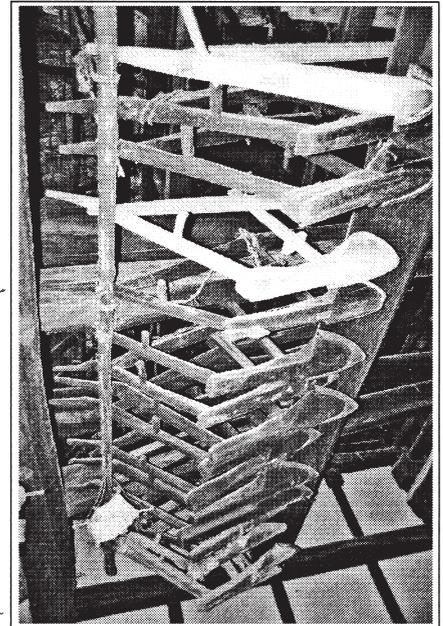
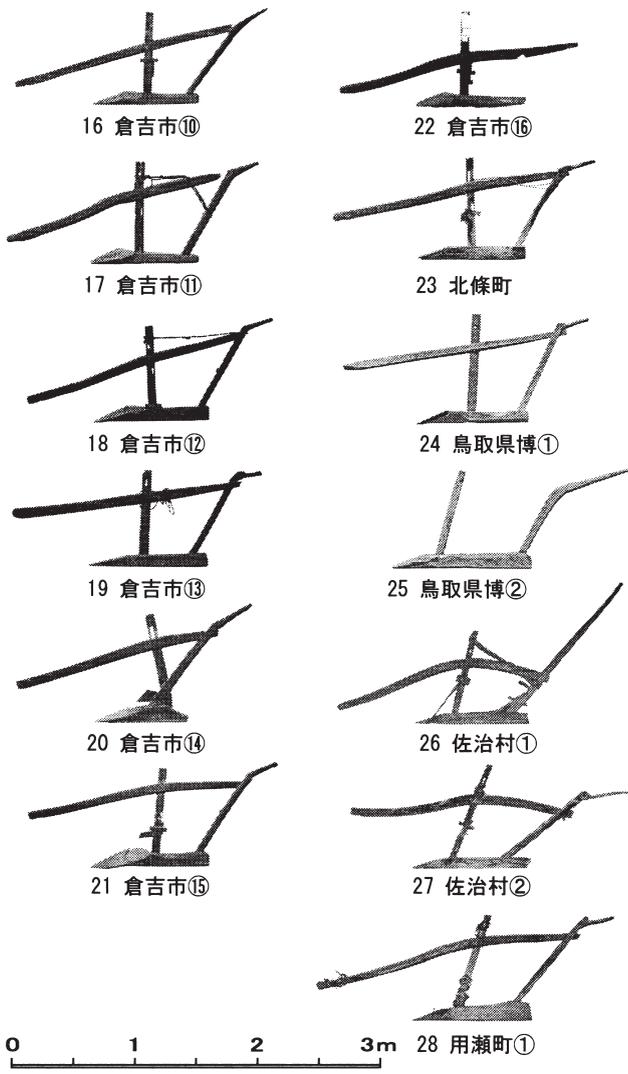
1-3 鳥 取 県

〔図6〕は鳥取県の在来犁と計測表で、倉吉博物館の犁が半数以上を占める。これは豪農香川家の梁に掛けられていた資料が一括移管されたため希有で貴重なコレクション。No.2の日野町犁は朝鮮系・政府モデル犁の混血型、No.20はX脚有床犁で、近代短床犁の影響のもとで地元職人が考案したものか。その他ほとんどは下降直轆・犁への押さえ木方式・トの字形把手の倉吉タイプの混血型。No.26は播磨型の犁で、室町の武将赤松氏の因幡進出の痕跡かと思われる。

図 6 鳥 取 県



No	市町村 収蔵施設	轆先 x	犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心 x	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
1	米子市立山陰歴史館	49.0	93.0		161.3	79.0	210.3	9.3	49.0	4.6
2	日野町歴史民俗資料館	30.5	60.0		151.8	73.0	182.3	7.5	45.5	3.4
3	旧東伯町民俗資料館① 三朝町坂本	52.3	94.0		150.0	78.0	202.3	10.8	43.4	4.7
4	旧東伯町民俗資料館②	55.7	77.0		132.0	79.6	187.7			
5	旧東伯町民俗資料館③ 犁轆欠	61.8	64.5		109.5	87.5	171.3			
6	琴浦町歴史民俗資料館									
7	倉吉博物館① 92-999 香川家	66.2		88.7	141.8	88.3	208.0	11.9	43.0	5.1
8	倉吉博物館② 92-994 香川家	65.0		88.4	137.0	80.2	202.0	11.9	43.8	5.2
9	倉吉博物館③ 92-1003 香川家	63.5	99.0		140.2	90.0	203.7	14.9	43.0	6.4
10	倉吉博物館④ 92-997 香川家	64.8	102.0		139.5	88.5	204.3	14.6	44.0	6.4
11	倉吉博物館⑤ 92-996 香川家	55.0	97.6		153.5	86.5	208.5	13.8	48.0	6.6
12	倉吉博物館⑥ 92-1007 香川家	61.3	96.5		138.3	89.7	199.6	14.5	44.8	6.5
13	倉吉博物館⑦ 92-1004 香川家	58.5		93.0	140.2	81.3	198.7			
14	倉吉博物館⑧ 92-1008 香川家	69.2		92.3	135.0	91.3	204.2			
15	倉吉博物館⑨ 92-998 香川家	62.2	102.5		154.2	75.5	216.4			



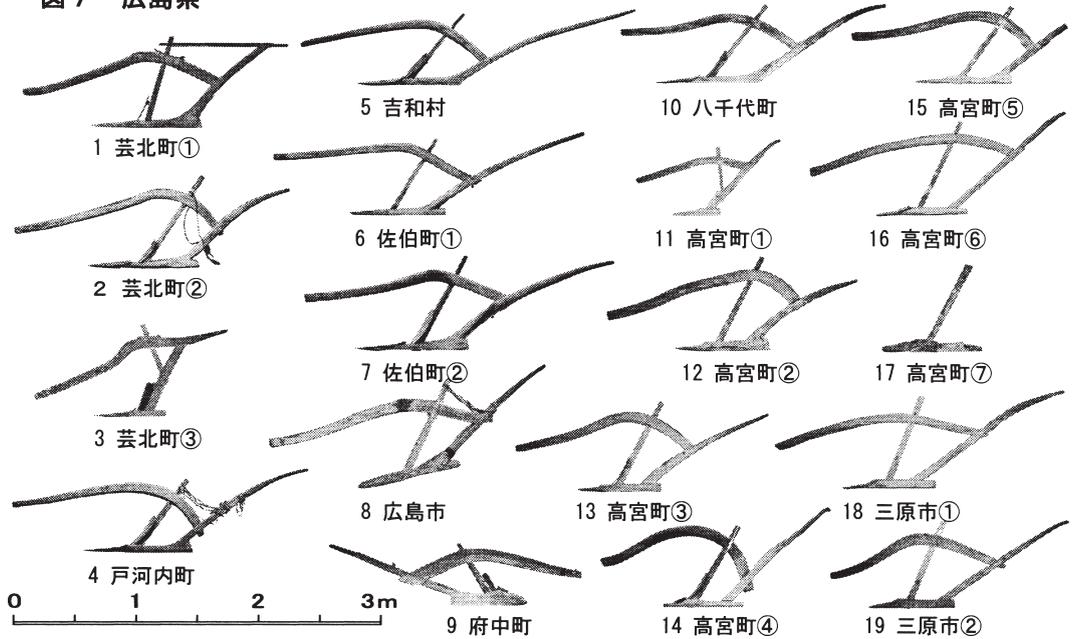
◆土間の梁に掛けられた犁 (1983)  
 倉吉の豪農、香川家の土間の梁には十数台の犁が掛けられていた。全国的にも珍しい例で、建物の解体にもなつて犁は一括して倉吉博物館に収集され、貴重なコレクションとなっている。

No	市町村 収蔵施設	轆先 x	犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心 x	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
16	倉吉博物館⑩ 92-1009 香川家									
17	倉吉博物館⑪ 92-1006 香川家									
18	倉吉博物館⑫ 2138									
19	倉吉博物館⑬ K0011									
20	倉吉博物館⑭ 92-0090	53.0	64.8		140.8	62.0	193.8	8.4	34.3	2.9
21	倉吉博物館⑮ 展示									
22	倉吉博物館⑯ 犁柄欠									
23	北條町歴史民俗資料館	69.0		88.0	144.3	80.5	213.3			
24	鳥取県立博物館①	57.8	87.5		144.5	87.0	202.3	11.8	47.3	5.6
25	鳥取県立博物館② 犁轆欠			114.5	197.0	77.5	197.0			
26	佐治歴史民俗資料館①	63.5	93.0		170.0	117.0	233.5	11.9	42.8	5.1
27	佐治歴史民俗資料館②									
28	用瀬町郷土歴史館①	74.0		93.6	169.0	87.0	243.0	12.5		
29	用瀬町郷土歴史館②	66.3		85.5	176.3	88.0	242.6	13.3	51.0	6.8

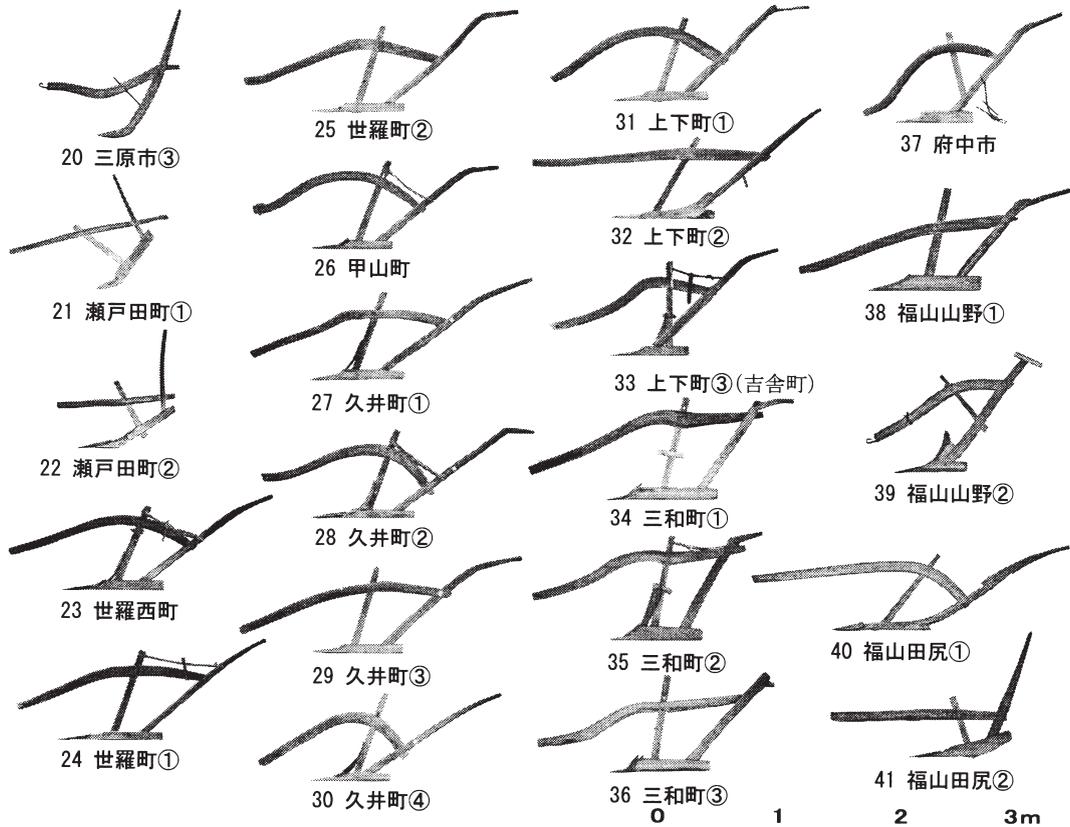
1-4 広島県

〔図7〕は広島県の在来犁と計測表で、鳥取県とは違って曲轅犁が主流を占める。No.1~15あたりの県西部では犁床・犁柄一木造りで、後方に大きく倒れ込んだ下反り犁柄が目立つが、これは山口県東部山間部からの連続である。No.18以降の県東部では、犁柄は握り部分で屈曲したり、枝分かれ部分を利用した逆L字形把手が主流となる。No.36, 37の瀬戸田町犁は犁床が前傾した特異な形態だが、漁民が見よう見まねで畑作犁を製作したルーツをもつかと思われる。

図 7 広島県



No	市町村 収蔵施設	轅先		犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心 x	復元力 kgm
		x		先有	先無	x	y				
1	芸北町立民俗博物館①	55.3			91.0	164.0	70.8	219.3	11.2	58.0	6.5
2	芸北町立民俗博物館②	57.0		92.0		169.0		226.0			
3	芸北町立民俗博物館③	47.0		61.0		113.5	72.0	160.5	10.3	33.0	3.4
4	セリ工戸河内	59.5		88.0		185.0	69.8	244.5	10.4	53.0	5.5
5	吉和村民俗資料館	48.0		83.8		229.0	63.5	277.0	9.3	61.3	5.7
6	佐伯町歴史民俗資料館①	62.8			79.7	192.3	69.0	255.1	7.1	55.5	3.9
7	佐伯町歴史民俗資料館② 玖島	34.3		82.5					11.7	56.0	6.6
8	広島市郷土資料館										
9	府中町歴史民俗資料館										
10	八千代町土師民俗資料館	29.0		88.0		190.2	65.0	219.2	10.2	61.0	6.2
11	高宮町民具収蔵庫①	37.0			51.5	83.5	58.0	120.5	7.1	44.3	3.1
12	高宮町民具収蔵庫②	57.8			78.5	150.0	61.0	207.8	10.7	53.3	5.7
13	高宮町民具収蔵庫③	53.5			69.5	157.4	64.5	210.9	10.5	48.0	5.0
14	高宮町民具収蔵庫④	52.0			64.5	139.0	82.5	191.0	9.6	36.0	3.5
15	高宮町民具収蔵庫⑤ 犁柄途中切除				78.0						
16	高宮町民具収蔵庫⑥	53.5			75.5	157.0	82.4	210.5			
17	高宮町民具収蔵庫⑦ 轅柄欠				82.5						
18	三原歴史民俗資料館① 八幡町	58.0			76.0	182.5	76.5	240.5	10.6	51.5	5.5
19	三原歴史民俗資料館②	30.5			70.0	165.0	68.0	195.5	7.7		

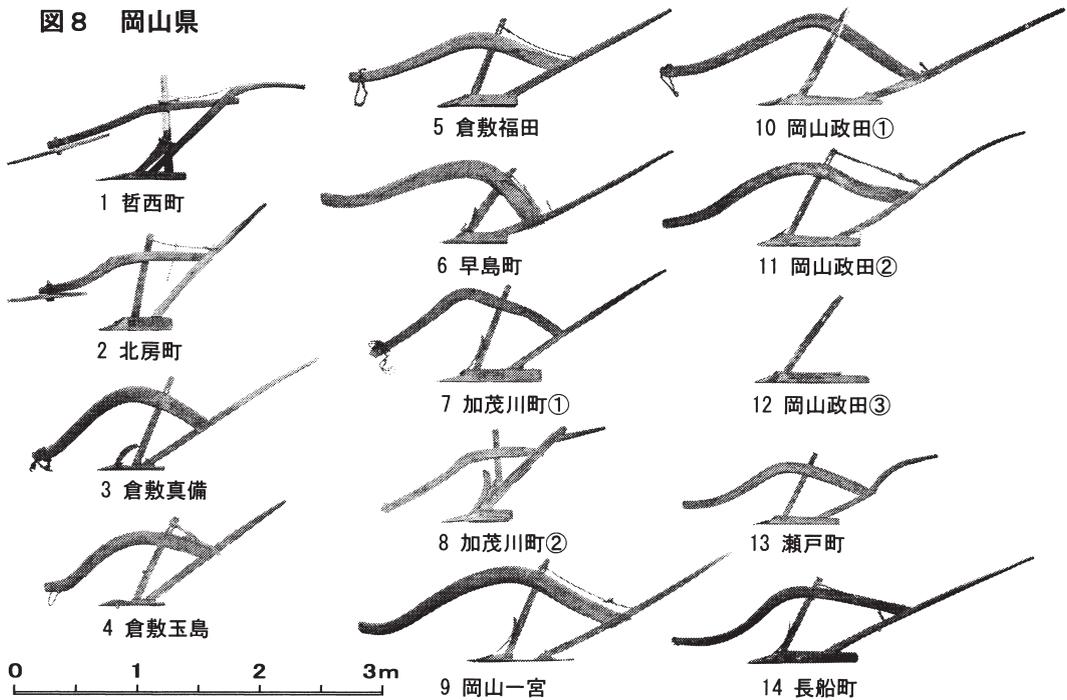


No	市町村 収蔵施設	轆先 x	犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心 x	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
20	三原歴史民俗資料館③	36.5			82.0	102.5	118.5	5.7	21.5	1.2
21	瀬戸田町歴史民俗資料館①	82.0		0.0	44.3	80.0	126.3	5.1	0.8	0.0
22	瀬戸田町歴史民俗資料館②	18.9		34.0	75.5	100.0	94.4	6.0	37.3	2.2
23	世羅西町郷土資料館	41.2	85.5		175.0	79.3	216.2	11.8	55.5	6.5
24	世羅町民俗資料館①	32.3	87.8		173.3	83.0	205.6	10.2	54.5	5.6
25	世羅町民俗資料館②	56.5	74.5		171.5		228.0			
26	甲山町八田原民俗資料館	47.5		66.5	155.0	69.0	202.5			
27	久井町歴史民俗資料館① 9号	52.5		78.5	180.0	79.0	232.5	12.3	50.5	6.2
28	久井町歴史民俗資料館② 10号	40.5	86.5		182.5		223.0			
29	久井町歴史民俗資料館③ 7号	63.0		74.0	168.0		231.0			
30	久井町歴史民俗資料館④ 8号	46.0		67.0	156.5		202.5			
31	上下町農村文化資料館① 甲山町東	52.0		75.0	160.0	74.0	212.0	9.0	44.5	4.0
32	上下町農村文化資料館②	65.0		84.5	174.0	89.0	239.0	8.7	57.5	5.0
33	上下町農村文化資料館③ 吉舎町敷地	50.0		65.0	140.0	86.0	190.0	9.0	42.5	3.8
34	三和町歴史民俗資料館① 井関	62.2	91.0		156.5	83.4	218.7	14.5	51.0	7.4
35	三和町歴史民俗資料館② 井関	61.8		75.2	129.0	91.8	190.8	15.7	41.0	6.4
36	三和町歴史民俗資料館③	60.3		82.0	137.5		197.8	13.7	41.5	5.7
37	府中市歴史民俗資料館	28.0		63.8	135.5	85.7	163.5	9.0		
38	福山市山野民俗資料館①	57.5		89.0	165.0	84.0	222.5	16.9	47.5	8.0
39	福山市山野民俗資料館②		53.0							
40	福山市田尻民俗資料館①	58.7	79.0		205.5	73.5	264.2	9.3	65.0	6.0
41	福山市田尻民俗資料館②	60.8	82.5		103.5	103.0	164.3	10.7		

1-5 岡山県

〔図8〕は岡山県の在来犁と計測表で、No.3~12の倉敷・岡山市域には太くて立派な曲轆と後ろに倒れ込んだ犁柄が目立つ。曲轆は政府モデル犁を象徴するもので、No.6の犁轆の中央部の太さは高さ14.7cm、幅12.5cmで日本最大級。倉敷・岡山市域は吉備政権の中心域であり、太い曲轆は大和政権と同盟関係にあったかつての栄光を語ろうとしたものか。後傾犁柄と上方に突き出た短い把手、それに犁柱と犁柄の縄締めは朝鮮系犁チェンギの痕跡。吉備政権の中心域には5世紀後半~6世紀には渡来人が来ていたのである。

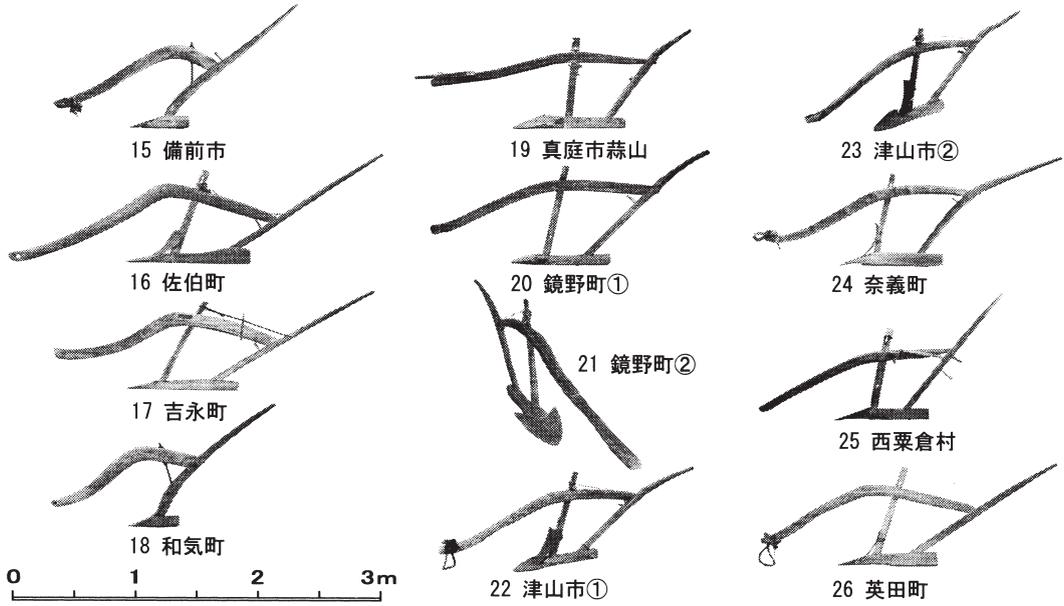
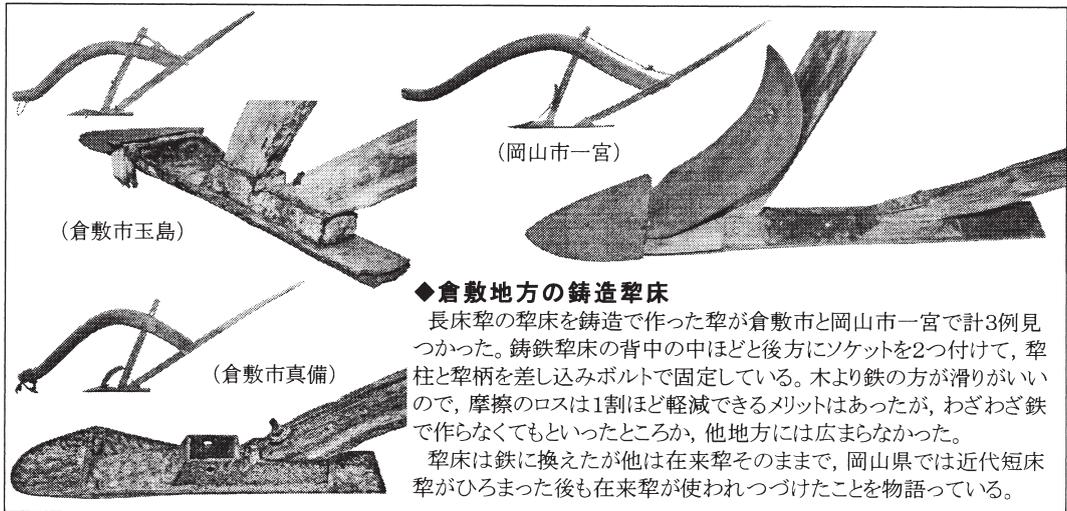
図8 岡山県



No	市町村 収蔵施設	轆先 x	犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
1	阿哲郡哲西町上神代 (三徳園 576)	43.0	71.8		166.0	75.5	209.0	12.4	48.0	6.0
2	北房ふるさとセンター 北房町下啓部	49.2		59.5	141.0	104.4	190.2	10.9	29.0	3.2
3	倉敷市真備歴史民俗資料館	54.5	57.3		183.0	85.3	237.5			
4	玉島歴史民俗海洋資料館 玉島乙島	42.5	54.0		150.5	84.5	193.0	11.4	37.2	4.2
5	福田歴史民俗資料館 福田東塚 うしんが	72.3	67.0		192.5	82.2	264.8	12.1	47.5	5.7
6	倉敷市収蔵庫 6177 早島	93.0			196.0	78.0	289.0	13.2	29.5	3.9
7	吉備中央町加茂川歴史民俗資料館①	52.3	80.4		190.0	94.7	242.3	16.1	41.0	6.6
8	吉備中央町加茂川歴史民俗資料館②	49.0	54.8		136.0	73.3	185.0	11.8	30.0	3.5
9	岡山市一宮尾上 (三徳園 344 うしんが)	94.0	86.7		221.5	88.3	315.5			
10	政田民俗資料館① A8-3 349 政津	83.0	100.0		252.2	75.4	335.2	12.4	55.7	6.9
11	政田民俗資料館② A8-5 808 政津	76.5	86.8		225.0	90.3	301.5	14.9	45.3	6.7
12	政田民俗資料館③ A8-11 90 政津			93.6						
13	岡山市瀬戸町郷土館	69.1			140.0	79.0	209.1			
14	邑久郡長船町牛文 (三徳園 354 うしんが)	57.0	88.0		250.0	87.5	307.0			

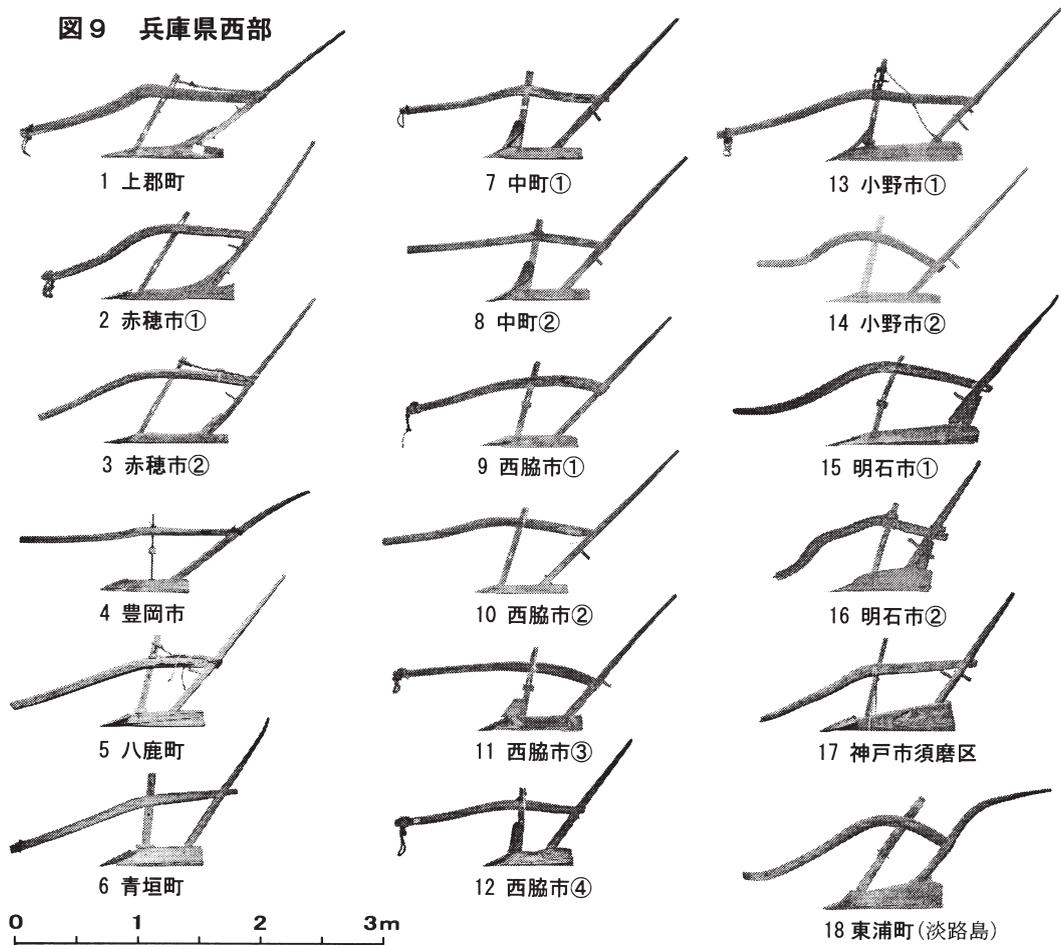
三徳園:岡山県立青少年農林文化センター三徳園

吉備氏の支配域を連続して観察する便宜上、備中・備前・美作の順に配列した



No	市町村 収蔵施設	轆先 x	犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
15	備前市歴史民俗資料館	69.5		42.8	128.6	107.4	198.1	9.8	26.3	2.6
16	和気郡佐伯町矢田 (三徳園 254)	80.0	96.7		232.0	103.0	312.0			
17	田原井堰資料館 旧和気郡吉永町	59.5		89.5	203.0	83.7	262.5	9.4	51.0	4.8
18	和気町歴史民俗資料館	60.0		39.9	116.0	94.5	176.0	6.3	22.0	1.4
19	蒜山郷土館 真庭市旧八束村・川上村	64.0			148.0	82.0	212.0	12.3	25.5	3.1
20	鏡野町① 文化伝習館「苫田高校」	64.0		77.3	164.0	90.8	228.0			
21	鏡野町② 教育歴史資料館	69.0	88.6		165.0	84.0	234.0			
22	津山弥生の里文化財センター①									
23	津山弥生の里文化財センター②									
24	勝田郡奈義町高円 (三徳園 951)	64.0	86.8		185.0	91.0	249.0	16.0	43.0	6.9
25	英田郡西粟倉村影石 (三徳園 618)	64.8	76.0		140.2	105.4	205.0			
26	美作市英田歴史民俗資料館	58.4	78.5		184.0	85.0	242.4	11.6	41.8	4.8

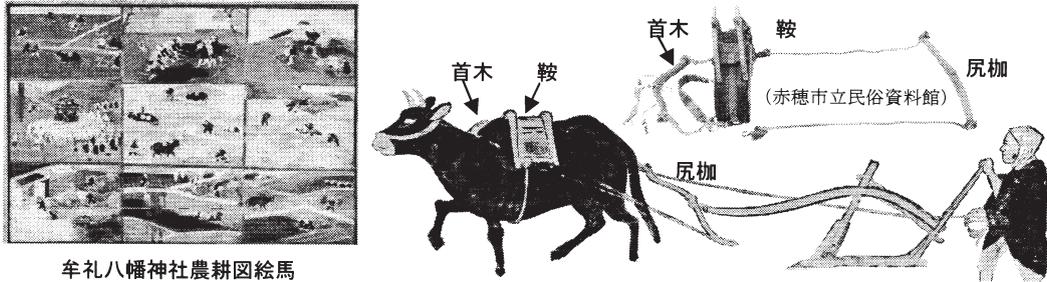
図 9 兵庫県西部



No	市町村 収蔵施設	轆先 x	犁床長		柄尻		全長	重量 kg	重心 x	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
1	上郡郷土資料館 406	68.0		98.5	198.5	109.0	266.5	11.2	54.0	6.0
2	赤穂市立民俗資料館① 下置き展示	51.2	99.3		174.1	122.7	225.3	7.7	52.6	4.1
3	赤穂市立民俗資料館② 壁掛け展示	56.0	97.0		172.5	115.0	228.5	9.7	51.5	5.0
4	豊岡市野上町(兵庫県立歴史博物館)	68.0	75.0		173.0	87.0	241.0			0.0
5	八鹿町三谷(神戸深江生活文化史料館)	75.0	83.5		149.5	122.7	224.5	7.6	36.0	2.7
6	青垣町(斎藤純氏写真)									
7	中町那珂ふれあい館① 37-5	68.1	79.8		162.0	115.0	230.1	8.0	40.5	3.2
8	中町那珂ふれあい館②	62.0	83.0		168.0	114.5	230.0	10.0	44.8	4.5
9	西脇市郷土資料館① 4429-3	60.8		80.2	163.0		223.8	7.8	44.0	3.4
10	西脇市郷土資料館② 4429-2	75.5		77.0	167.0	117.0	242.5	7.8	41.0	3.2
11	西脇市郷土資料館③ 4429-1	70.8	83.3		164.0	117.8	234.8	8.4	41.5	3.5
12	西脇市郷土資料館④ 902	71.5	75.5		124.3	107.5	195.8	9.3	29.0	2.7
13	小野市好古館①	86.3	109.5		198.8	126.0	285.1	12.1	43.8	5.3
14	小野市好古館②	56.3		91.5	167.0	110.0	223.3			
15	明石市立文化博物館①	76.0	118.5		192.0	124.0	268.0	14.1	57.6	8.1
16	明石市立文化博物館② 伊川谷	46.0	78.5		121.0	106.8	167.0	10.3	39.3	4.0
17	神戸市須磨区(原野農芸博物館)	47.0	110.0							
18	津名郡東浦町(兵庫県立歴史博物館)	63.0		96.0	188.0	98.0	251.0			

1-6 兵庫県西部

〔図9〕は兵庫県西部の在来犁と計測表で、曲轅と斜めに突き上がった直棒把手が目立つ。直棒把手と四角枠犁内に斜め前方に短く突き出た枠内小把手は朝鮮系犁チェンギからの継承で、犁柱・犁柄間に縄を掛けて短棒を挿し込んで捻って締める柱柄縄締も朝鮮系犁からの継承。上郡・赤穂・八鹿・小野・明石・須磨の辺りには5世紀後半～6世紀から渡来人が住んでいたことが確認できる。『源氏物語』の舞台の明石にも須磨にも渡来人が来ていたのである。



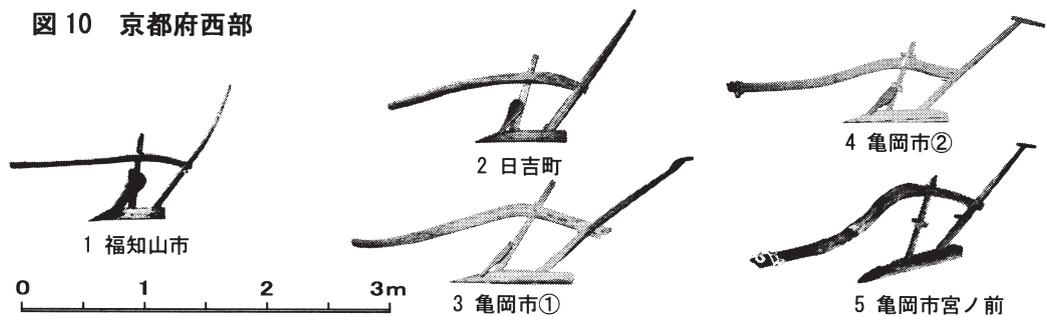
牟礼八幡神社農耕図絵馬

兵庫県は関西系牽引法 赤穂市の牟礼八幡神社には明治時代の制作と推定される農耕図絵馬が奉納されている。画面は図示したように9区画に分けられ、左上の区画には牛を使って田起しをする場面が描かれている。牛には首木と鞍を掛けているが、この首引き胴引き法は関西で広く見られるもので、岡山県以西や四国・九州の鞍だけで引かせる胴引き法とは異なっている。赤穂市は兵庫県の西端、県境が牽引法の境界と重なることが確認できたことになる。

1-7 京都府西部

〔図10〕は京都府西部の在来犁と計測表でほとんど未調査だが、すべて曲轅犁で、福知山と日吉町は直棒把手、亀岡市は前後棒把手である。3市町村だけで京都府西部の特徴は語れないので、とりあえず資料提示にとどめておきたい。

図10 京都府西部



No	市町村 収蔵施設	轅先 x	犁床長		柄尻		全長	重量	重心 x	復元力 kgm
			先有	先無	x	y				
1	福知山市雲原(東京農業大学図書館図録)		63.5							
2	日吉町殿田小学校	73.0	72.5		133.5	104.5	206.5	9.0	33.0	3.0
3	亀岡市文化資料館①	91.0								
4	亀岡市文化資料館②	74.5		89.0	185.0	97.5	259.5	12.7	51.5	6.5
5	亀岡市宮ノ前(『京都府の民具』1978)		100.0				275.0			

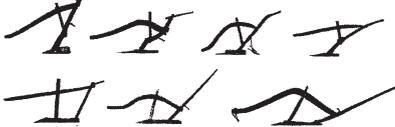
祖型① 朝鮮半島の犁		
中国地方 方 犁	朝鮮系	
	朝・政 混血型	
	政府系	
祖型② 政府モデル犁		
中国地方の 見よう見まね型		

図 11 中国地方の在来犁分布

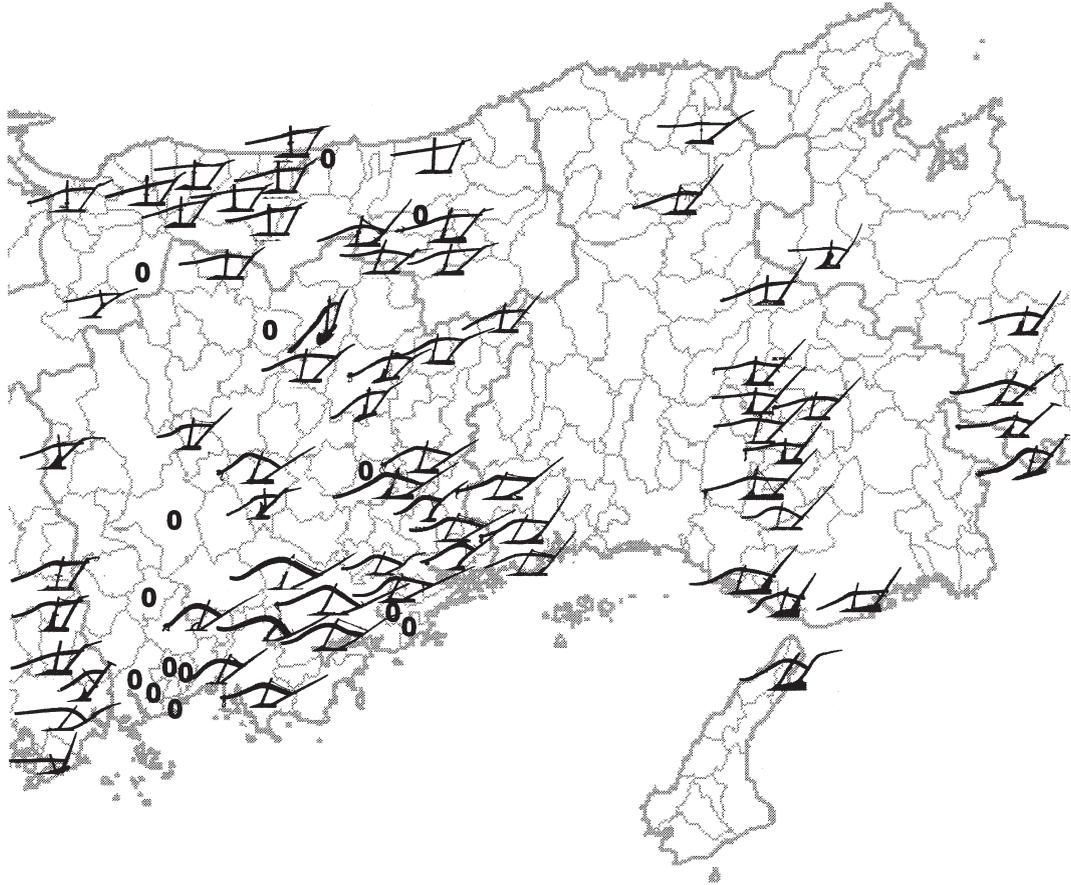
- ・犁はシルエット加工し、左向きに統一した。
- ・大きさは同一縮尺にして相対的大小関係は維持した。
- ・犁数の多い市町村は3台を目処に間引いた。
- ・0 は調査したが在来犁が収集されていなかった市町村で在来犁が使われていなかったことを意味しない。
- ・1, 3 は在来犁を確認したが調査時間がなかった市町村。





山口県	鳥取県	広島県		岡山県	兵庫県
川上村 → 萩市 小野田市 → 山陽小野田市 鹿野町 → 周南市 本郷村・美和町・ 玖珂町・周東町・ 由宇町 → 岩国市 大島町・久賀町・ 橋町・東和町 → 周防大島町	東伯町 → 琴浦町 北條町 → 北栄町 河原町・佐治村・ 用瀬町 → 鳥取市	芸北町 → 北広島町 戸河内町 → 安芸太田町 吉和村・佐伯町 → 廿日市市 八千代町・高宮町 → 安芸高田市	世羅西町・甲山町 → 世羅町 久井町 → 三原市 瀬戸田町 → 尾道市 上下町 → 府中市 三和町 → 神石高原町	真備町 → 倉敷市 加茂川町 → 吉備中央町 吉井町・山陽町 → 赤磐市 佐伯町 → 和気町 川上村・八束村・ 北房町 → 真庭市 富村 → 鏡野町 英田町 → 美作市	八鹿町 → 養父市 中町 → 多可町 東浦町 → 淡路市

調査に関係した平成の大合併前後の市町村。掲載許可は合併後の教育委員会にお願いした。



### 1-8 在来犁分布

〔図 11〕は今回取り上げた在来犁を地図に落としたもの。空白はほぼ未調査地で、調査地での混み具合からすれば、中国地方ではほとんどの地域で在来犁が使われていたことが分かる。

形態分類表に照らし合わせれば中国地方ではほとんどが朝鮮系と中国系政府モデルとの混血型で、各地に渡来人が来ていたことになる。混血のない政府モデル犁系は山口県から広島県の山間部に見られるが、ここは渡来人が来ていなかったところ。また隠岐は純粋朝鮮系犁で、離島で政府の影響が低かったか、百濟難民あるいは中世漂着民の持ち込みであろう。





図 13 朝鮮系無床犂の痕跡 —朝鮮系要素の数値化—

朝鮮系無床犂や独脚有床犂の三角枠は朝鮮系犂の基本骨格なので2点, その他は1点

県名	No	市町村	三角枠	下降直轆	柱柄縄締	枠内把手	直棒把手	床幅牽頭	点
山口	1	美祢市①	○						2
	2	美祢市②					○		1
	3	川上村	○				○		3
	4	山口市①	○						2
	5	山口市②	○△						3
	6	本郷村①							0
	7	本郷村②					○		1
	8	本郷村③			△				1
	9	美和町							0
	10	美和歴民							0
	11	岩国市①				○			1
	12	岩国市②							0
	13	岩国市③							0
	14	岩国市④					○		1
	15	岩国市⑤							0
	16	玖珂町							0
	17	周東祖生					○		1
	18	由宇町					○		1
	19	柳井市①							0
	20	柳井市②							0
	21	柳井市③	○						2
	22	柳井市④		○					1
	23	平生町①	○						2
	24	平生町②							0
	25	光市	○	○					3
	26	大島町①					○		1
	27	大島町②		○					1
	28	久賀町	○	△				○	4
島根	1	安来市	○	△					3
	2	隠岐	○	○			○		4
鳥取	1	米子市			△				1
	2	日野町	○	○	△				4
	3	東伯町①		○	○				2
	4	東伯町②		○	△				2
	5	東伯町③			△				1
	6	琴浦町		○	○				2
	7	倉吉博①		○					1
	8	倉吉博②		○	△				2
	9	倉吉博③		○	○				2
	10	倉吉博④							0
	11	倉吉博⑤							0
	12	倉吉博⑥		△	△				2
	13	倉吉博⑦			○				1
	14	倉吉博⑧		○					2
	15	倉吉博⑨			△				1
	16	倉吉博⑩		○	△				3
	17	倉吉博⑪			○				1
	18	倉吉博⑫			△	○			3
	19	倉吉博⑬			○	○			3
	20	倉吉博⑭	X脚	○	△				3
広島	21	倉吉博⑮	△	△					2
	22	倉吉博⑯							2
	23	北條町	○	○					2
	24	鳥取県①	○						1
	25	鳥取県②							1
	26	佐治村①			○	○	○		4
	27	佐治村②			○	○			1
	28	用瀬町①			△				1
	29	用瀬町②			△				1
	1	芸北町①			木				1
	2	芸北町②			○				1
	3	芸北町③	○						2
	4	戸河内町			○				1
	5	吉和村							0
	6	佐伯町①					○		1
	7	佐伯町②					○		1
	8	広島市			○				1
	9	府中町					○		1
	10	八千代町			△				1
	11	高宮町①	○						2
	12	高宮町②			△				1
13	高宮町③			△				1	
14	高宮町④					○		1	
15	高宮町⑤			△				1	
16	高宮町⑥			○				1	
17	高宮町⑦			△				1	
18	三原市①			△				1	
19	三原市②							0	
20	三原市③					○		1	
21	瀬戸田①		○					1	
22	瀬戸田②		○			○		2	
23	世羅西町			○				1	
24	世羅町①			○				1	
25	世羅町②			△				1	
26	甲山町			○				1	
27	久井町①			△				1	
28	久井町②			○				1	
29	久井町③							0	
30	久井町④							0	
31	上下町①			△				1	
32	上下町②		○	△				2	
33	上下町③	X脚	○					1	
34	三和町①			△				1	
35	三和町②			○				1	
36	三和町③			△				1	
37	府中市	○	○					3	
38	福山野①		△	△				2	
39	福山野②	○						2	
40	福田尻①			△				1	
41	福田尻②		○			○		2	
岡山	1	哲西町	X脚		○				1
	2	北房町			○		○		2
	3	倉敷真備			△		○		2
	4	倉敷玉島			○		○		2
	5	倉敷福田			○		○		2
	6	倉敷収蔵			○	○	○		3
	7	加茂川①			△		○		2
	8	加茂川②	○						2
	9	岡山一宮			○		○		2
	10	政田館①			△	○	○		3
	11	政田館②			○	△			2
	12	政田館③			△				1
	13	瀬戸町			△				1
	14	長船町			○	○			2
	15	備前市	○			○	○		4
	16	佐伯町			○	○	○		3
	17	田原井堰			○	○	○		3
	18	和気町	○				○		3
	19	蒜山郷土			△				1
	20	鏡野町①			△	○			2
	21	鏡野町②			○	○			2
	22	津山市①			○	○			2
	23	津山市②			○	○			2
	24	奈義町			△	○			2
	25	西粟倉村			△		○		2
	26	美作英田			△	△			3
1	上郡町			○	○	○		3	
2	赤穂市①			△	○	○		3	
3	赤穂市②			○	○	○		3	
4	豊岡市		△			△		2	
5	八鹿町			○	○	○		3	
6	青垣町					○		1	
7	中町①					○		1	
8	中町②					○		1	
9	西脇市①					○	○	2	
10	西脇市②					○	○	2	
11	西脇市③					○		1	
12	西脇市④					○	○	2	
13	小野市①			○		○	○	3	
14	小野市②					○	○	2	
15	明石市①					○	○	3	
16	明石市②					○	○	3	
17	神戸須磨					○	○	2	
18	淡路東浦							0	
京都西部	1	福知山市				○			1
	2	日吉町				○	○		2
	3	亀岡市①					○		1
	4	亀岡市②					○		1
	5	亀岡宮前						○	1

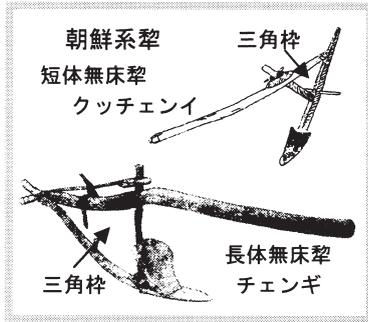
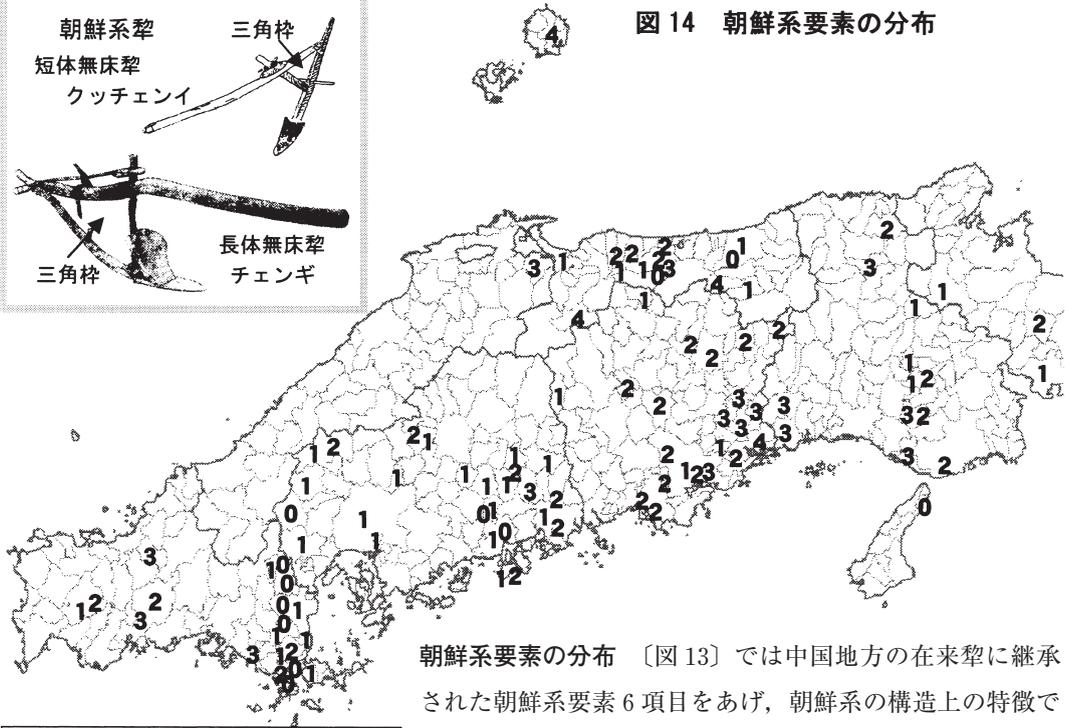


図 14 朝鮮系要素の分布



朝鮮系要素の分布〔図 13〕では中国地方の在来犁に継承された朝鮮系要素 6 項目をあげ、朝鮮系の構造上の特徴である三角枠は 2 点、その他は 1 点として、朝鮮系の継承度を数値化し、地図上に示したのが〔図 14〕である。

日本では 5 世紀後半～6 世紀に渡来人が朝鮮系無床犁を持ち込み、それが周辺の日本人集落にも広まりつつあった。そこに大化改新政府が富国強兵政策の一環として 662～3 年に中国系政府モデル犁を評督あてに送付して普及を図ったので、朝鮮系犁を使っていた地域では使い慣れた朝鮮系犁との混血が起こった。朝鮮系要素 4～1 点はその混血型で渡来人の居留地かその周辺であることを示しており、中国地方の渡来人密度の高さは驚きである。他方、朝鮮系要素のまったくない 0 点犁は政府モデル犁の後裔で、ここには渡来人が来ていなかったことを示している。

地図左上の枠内は朝鮮系犁。a は短体無床犁で、三角枠と直轆・直棒把手が特徴。b は長体無床犁で、犁へら・柱柄縄締と枠内小把手が特徴である。下の枠内では隠岐の三角枠犁は朝鮮系犁そのもので、離島では政権の影響は少なかったことも考えられ、また百済滅亡時の難民かそれ以降の移民・漂着民の持ち込みの可能性もある。

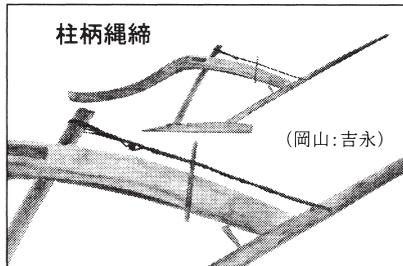
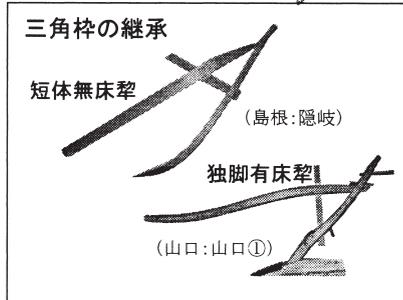
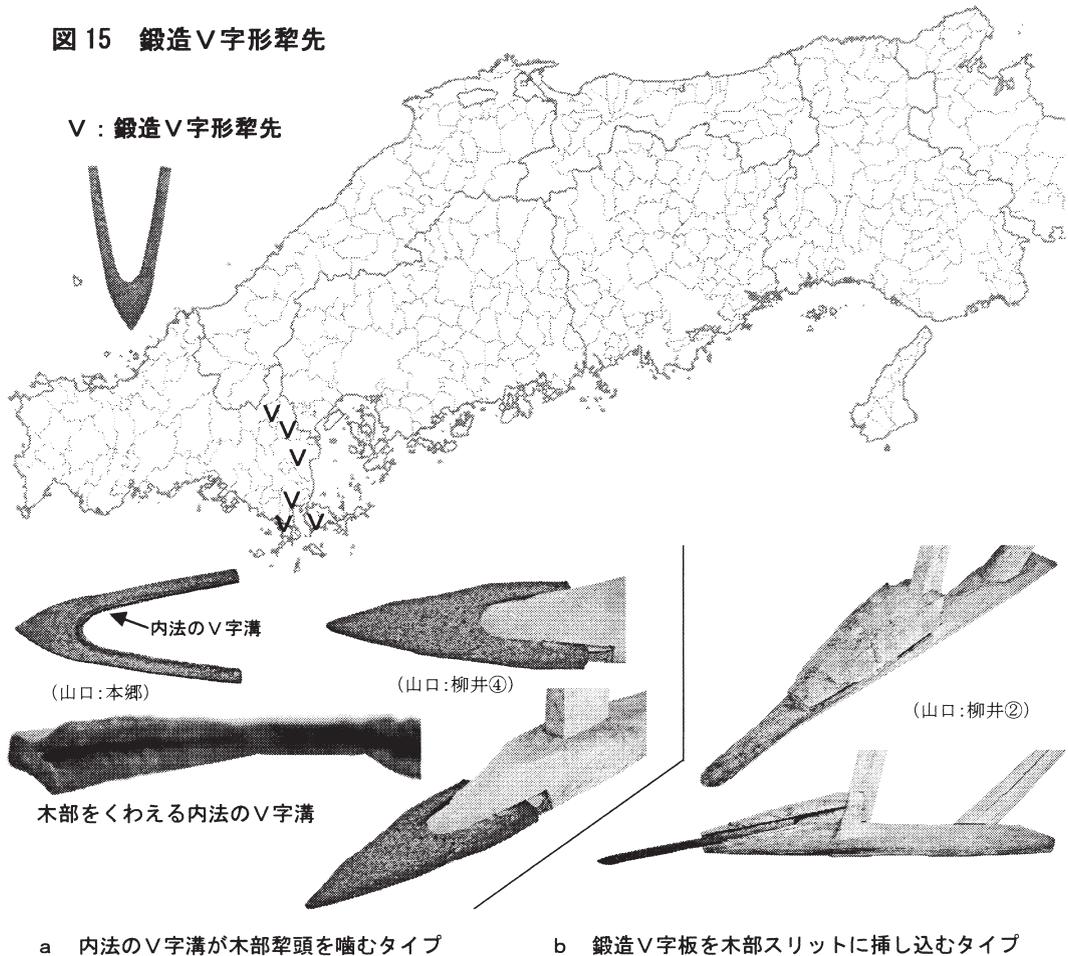


図15 鍛造V字形犁先

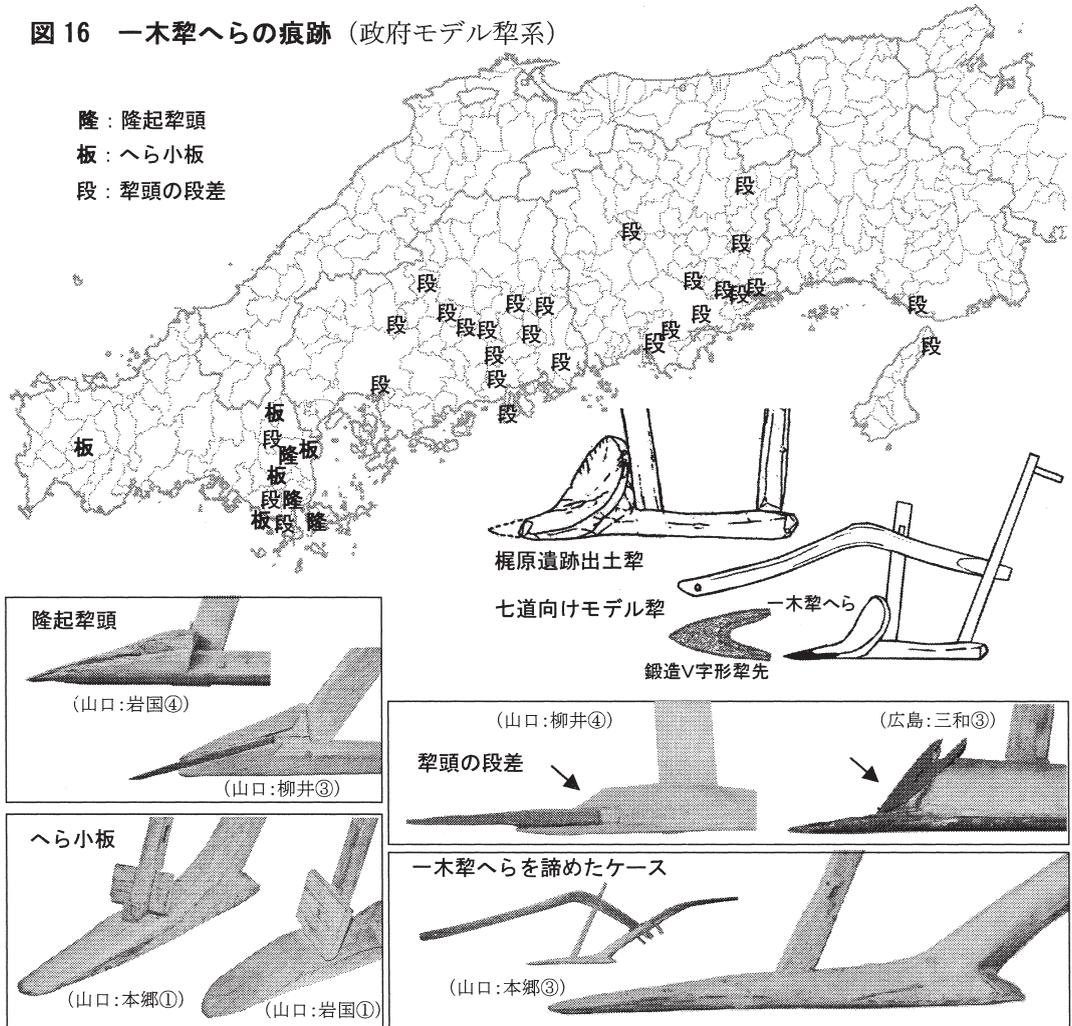


**鍛造V字形犁先** 犁先は朝鮮半島でも中国でも铸造品。铸铁は硬くて割れやすいが切れ味は抜群である。犁は鍬のように衝撃力で打ち込むのではなく地中で土塊や草の根を切りながらズルズル進むので切れ味が勝負となり、铸造品が使われるのである。

古墳時代では鉄は朝鮮半島からの輸入品なので貴重品だった。また鍛造品は鉄を800度に熱して叩くだけなので各地でU字形鍬先は製作されたが、鉄を1400度の高温で熔解して铸型に流し込む铸造は高度な技術の装置産業で主に畿内に限られた。そこで5世紀後半～6世紀に牛と犁を持ち込んだ朝鮮系渡来人はやむをえずU字形鍬先の先をV字形に尖らせた鍛造V字形犁先で対応したと考えられる。7世紀後半の大化改新政府も七道向けモデル犁は鍛造犁先とした。

中世以降に各地で铸物師の活動が活発になり鍛造犁先は铸造犁先に置き換わったが、四国と山口県の一部では铸物師が関わらなかったようで近代まで鍛造犁先が使われてきた。ここでは鍛造品は切れ味が悪いので槍先のように尖らせ、また内法のV字溝が難しいと感じた6世紀の人はV字鉄板を木部のスリットに挿し込むbタイプで対応した。

図 16 一木犁への痕跡 (政府モデル犁系)



**一木犁への痕跡** 犁先で起こした土塊を反転させる犁へらは朝鮮半島でも中国でも铸造品。ところが鉄が貴重な日本では七道向けモデル犁には丸太材から犁床と一体で犁へらを削り出す「一木犁へら」が採用された。朝鮮にも中国にもない日本独自の途上国型である。

丸太材から一体で犁へらを削り出すのは難しく太い材も必要、そのうえ心持ち材から削り出した一木犁へらは乾燥が進むとひび割れて欠損する。この一木犁へらモデルを前にした人々は、自分の技倆にあわせて様々な対応をした。「隆起犁頭」は一木犁へらには及ばないが、犁頭部分をマッチョに盛り上げることで犁へら効果を持たせようとしたもの。「へら小板」は小板を犁柱前面に貼り付けたり犁柱に挿し込んだりして犁へら効果をねらった健気な対応。「犁頭の段差」は犁床を分厚くつくって犁へら面との間に5cm前後の段差を設けて犁へら効果をねらったもの。さらには一木犁へらの採用を諦め、犁床と犁柄を一本造りにしたタイプも見られる。これらは一旦形が決まると壊れても同じ形で更新されるため、20世紀まで継承されてきたのである。

図17 独脚有床犁/X脚有床犁



**独脚有床犁 (混血型)** 政府モデルの中国系長床犁が送付されてきたとき、朝鮮系犁を使い慣れた人々が三角杵無床犁に政府モデル犁の犁床を履かせたのが「独脚有床犁」。見るからに安定性が良さそうな犁床だけ採用したのであろう。混血の起こったのは662~3年で、それ以来基本的に形は変わっていないと考えられる。独脚有床犁の分布地は渡来人が来ていたところだが、山間部の場合は平安時代以降に平野部からの開拓移住で持ち込まれた可能性が高い。

**X脚有床犁 (近代改良型)** 長床犁の犁柱と犁柄をクロスさせて全長を短くしたもので、bやcの把手の不釣り合いな大きさは長床犁であったことの痕跡であろう。大正以降、小振りを取り回しの楽な近代短床犁に対抗して在来犁職人が考案したものと考えられる。

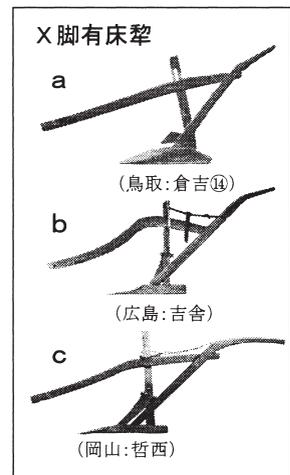
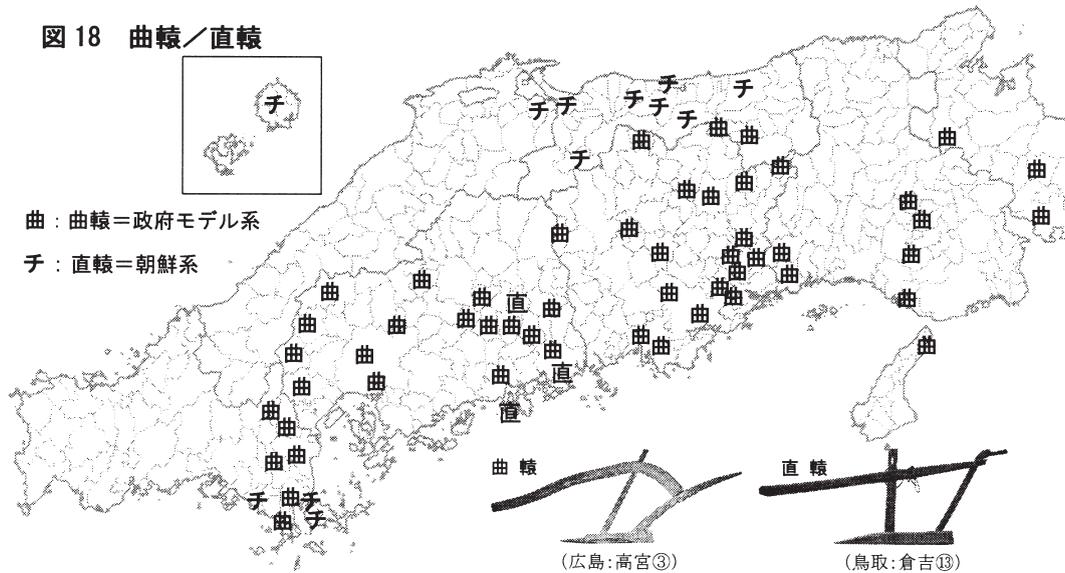


図 18 曲轆／直轆



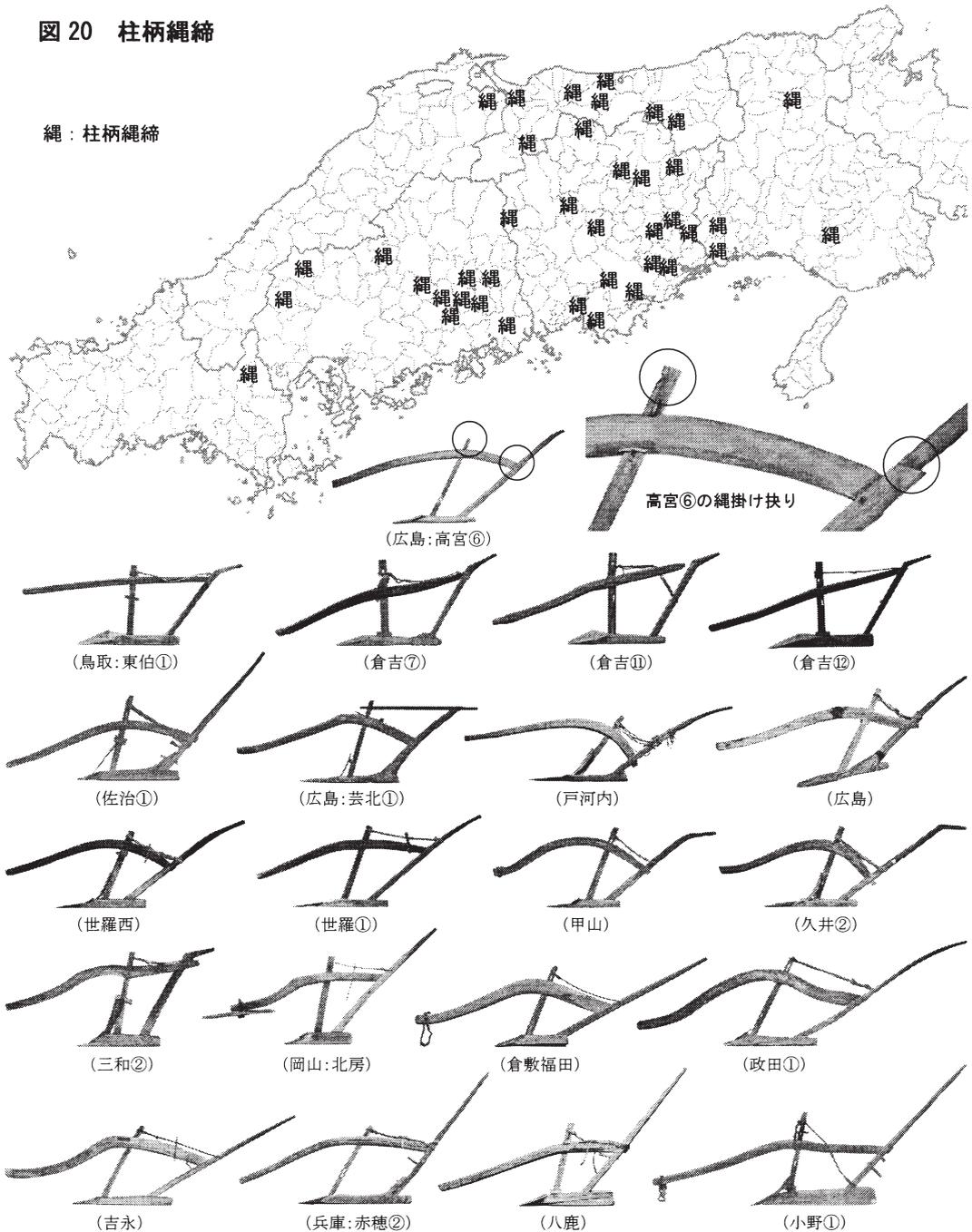
曲轆（政府系）／直轆（朝鮮系）「曲轆」は中国系で政府モデル犁の特徴、「直轆」は朝鮮系犁の特徴。犁耕処女地では政府モデルの曲轆が定着したが、朝鮮系犁の使われていた地域では直轆か曲轆かの選択に迫られた。直轆を捨てて曲轆を採用した人は政府に協力的だったわけで、山陽道は政権支持率が高かったようだ。直轆の鳥取県は朝鮮系文化が強かったのであろう。

図 19 トの字形把手／直棒把手



トの字形把手／逆L字形把手（政府系） 犁柄の上端に短い握り棒を挿し込んだのが「トの字形把手」、それを枝分かれ材を使って一木造りで逆L字形に作ったのが「逆L字形把手」で、どちらも政府モデル系。それに対して犁柄上端が斜め後方に伸び上がってそのまま握りとなったのが「直棒把手」で朝鮮系。岡山県海岸部から兵庫県にかけては朝鮮系直棒把手が目立っている。

図20 柱柄縄締



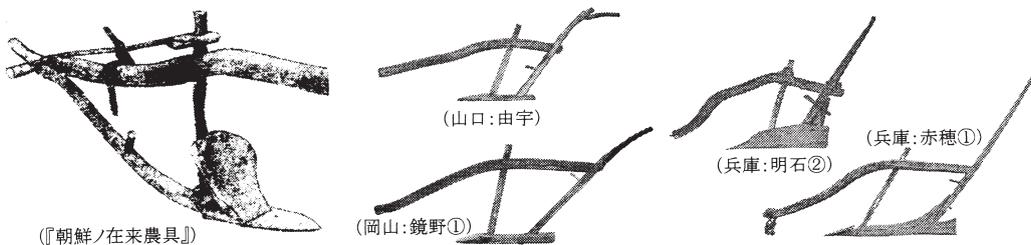
**柱柄縄締**（朝鮮系） 犁柱上部と犁柄に縄を掛け、中ほどを棒で捻って締めるのが「柱柄縄締」。農具はもともと農家の自家製、犁轆と犁柄はしっかりと固定しないと作業中に犁は解体してしまうが、柄組みに自信のない人が縄締めで切りぬけたのが柱柄縄締で朝鮮系の伝統。近世以降、職人製作で堅牢な柄組みができてても柱柄縄締は遺伝子のように残って20世紀まで継承された。

図 21 床幅犁頭／枠内小把手

幅：床幅犁頭 枠：枠内小把手



床幅犁頭（朝鮮系）「床幅犁頭」は犁床（無床犁では犁身）の幅のまま犁先を挿し込む犁頭で「しゃもじ形犁頭」の反対語。床幅犁頭に犁先を挿し込むと隙間ができるが、そこに数本の楔を適当に打ち込んで固定するのが朝鮮方式。日本では七道諸国では鍛造V字形犁先が使われていたのでそれをうけるためにしゃもじ形犁頭となったが、一部で床幅犁頭が見られる。朝鮮系の床幅犁頭は中国地方ではおもに兵庫県に見られて京都府から滋賀県へとつづく。床幅犁頭の使われた地域は渡来当初から鑄造犁先だった可能性が高く、渡来系鑄造技術者がいた可能性が高い。



枠内小把手（朝鮮系）「枠内小把手」は朝鮮系犁の三角枠内に上方に突き出た転回用小把手。ところで政府モデル犁には犁柄の右側面に転回用小把手が付いていた。犁柄の右側面の小把手は届きやすいので採用されたが、使わなくなった枠内小把手も残ってしまった。伝統的農村社会では農具は壊れると同じ形で更新されたため、使わないまま20世紀まで継承されてきたのである。

### 3. 在来犁から見た中国地方の歴史

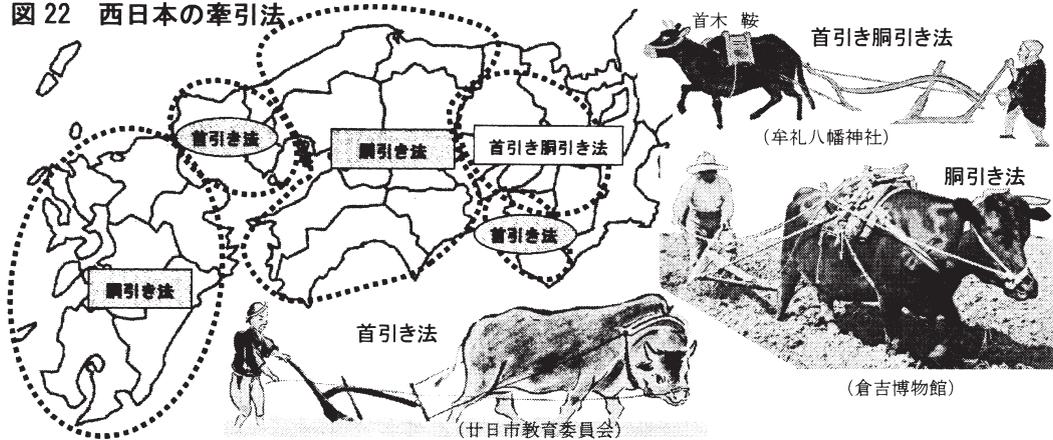
これまで政府モデル犁の痕跡、朝鮮系犁の痕跡を個別に見てきたが、それらをまとめて在来犁から中国地方の歴史はどう描けるのか、その初めての試みに挑戦してみよう。

#### 3-1 中国地方の渡来人

すでに見たように、朝鮮系要素の分布は独脚有床犁（図17）は山口・鳥根・鳥取・広島・岡山県、直轆（図18）は鳥取県、直棒把手（図19）は山口・広島・岡山・兵庫県・京都府、柱柄縄締（図20）は山口・鳥根・鳥取・広島・岡山・兵庫県、床幅犁頭（図21）は岡山・兵庫県・京都府、枠内小把手（図21）は山口・岡山・兵庫県と要素ごとに分布は変えながらも中国地方全域にわたっており、渡来人密度が高かったことを示している。

山口県と紀伊半島にアジアの首引き法（図22） 中国でも朝鮮半島でも牛の首木で農具を引かせる「首引き法」。日本人集落では馬の背鞍だけで馬鋤を引かせた経験から「胴引き法」や首木と鞍を併用する「首引き胴引き法」がおこなわれた。そのなかで山口県と紀伊半島だけが首引き法を20世紀まで継承してきた。ここでは渡来人のやり方が地域を席卷したのである。

図22 西日本の牽引法



朝鮮系首木は周防沿岸部が中心（図22） 山口県には朝鮮系と中国系の2種の首木が混在し、朝鮮系の「突起留め首木」「括れ首木」は光市・周防大島から岩国市にかけて分布密度が高い。

室積海岸に大型コリアタウン 光市の室積海岸は波除け完備の天然の良港。ムロツミは古語で迎賓館。周防は博多から大阪湾の難波津への中継拠点で迎賓館があったのであろう。朝鮮からの使者を迎えるには通訳が必要。大和政権はその養成のため朝鮮語を維持伝承できる大型コリアタウンを室積近辺に作らせたと考えられ、朝鮮系鼻木も残っている。

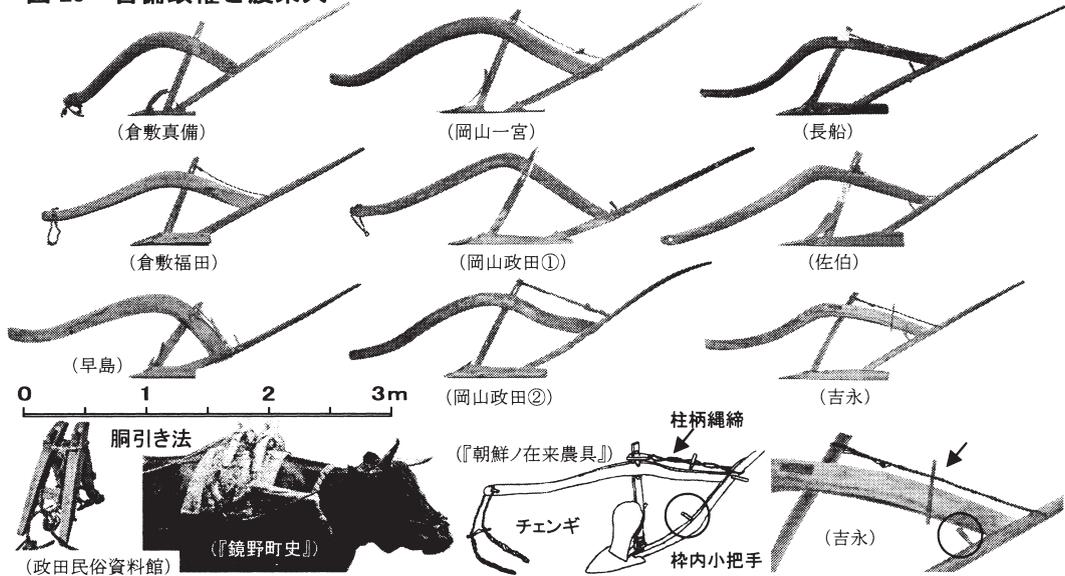


中国系首木は山間部に（図23） 他方、中国系の「引綱渡し首木」は662～3年に大化改新政府が政府モデル犁とセットで各地の評督に送りつけたもので、本郷・美和と広島県の佐伯・吉和町の山間部が中心であり、渡来人が来ていなかった地域であろう。





図 25 吉備政権と渡来人



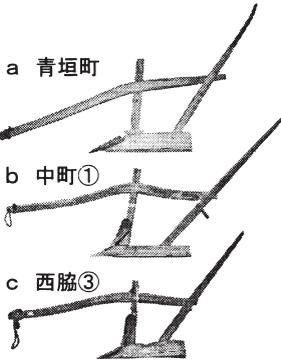
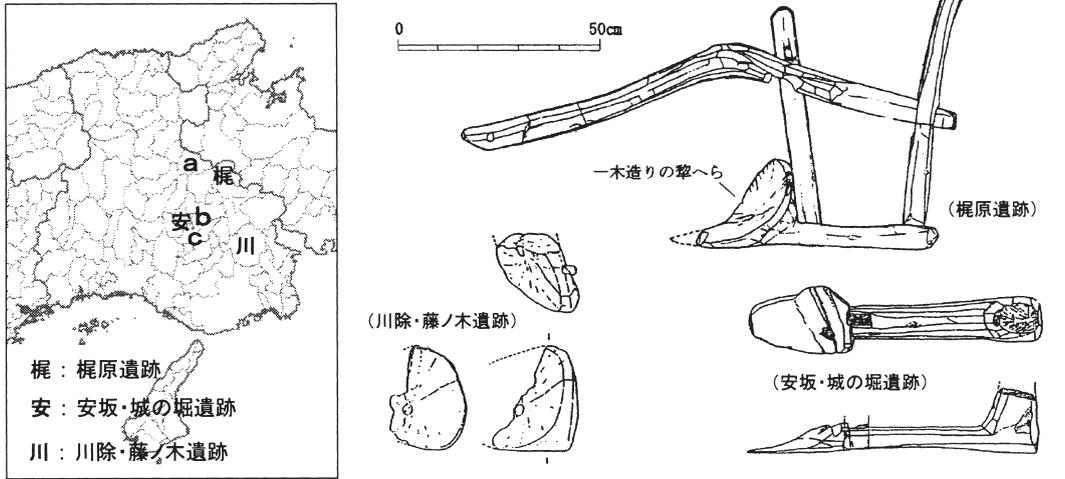
吉備政権と渡来人 (図 25) 岡山県の倉敷・岡山から吉永町まで、日本一立派な曲轆を備えた長床犁が分布する。隣接する備後・安芸や播磨には見られない備前・備中タイプで、中国地方の雄族吉備氏の本拠地にあたる。同じく朝鮮系を残す周防と比較しながらその違いを見ていこう。

周防の独脚有床犁は多くは 2 m 以下の小型なのに対して、備前・備中には 3 m 超の大型犁が 4 台ある。備前・備中の犁柄は 30 度前後に傾いて全長を長くしているが、これは朝鮮系チェンギの 34 度の傾きに倣ったもの。つまり手本となった朝鮮系犁は周防では短体のクッチェンイだったのに対して、備前・備中では長体のチェンギだったために犁体が大型化したのである。つまり渡来人の持ち込んだ朝鮮系犁が違っていただけで、彼らの故郷の違いであろう。

吉備は鞍で犁を引かせる胴引き法で日本人集落でおこなわれた方法、渡来人の首引き法を継承した周防とは対照的で、渡来人は雄族吉備氏の膝下に組み込まれて自己主張できる環境にはないまま 150~200 年を経過して、7 世紀後半の時点では同化がずいぶん進んでいたであろう。

古墳を飾る埴輪は吉備から生まれ、吉備氏は大和と同盟関係にあったが、雄略大王以降は反乱を抑えられ屯倉を設置されるなど上下関係に貶められたことからして、大和に反発し政府モデル犁を忌避すると思いきや、政府モデル犁を象徴する曲轆を雄大に飾り立てているのである。大方の予想を裏切って吉備氏自身はかつて大和と肩をならべ政権を支えてきた栄光の歴史を誇りに 7 世紀を生きていたことを、この雄大な曲轆犁は物語っている。

図 26 出土犁と在来犁とのズレ

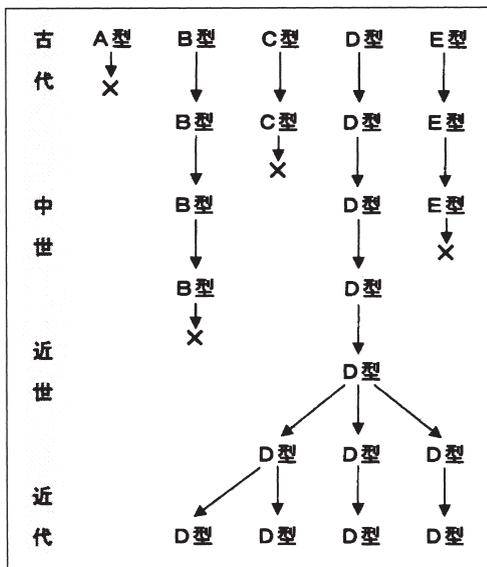


3-2 出土犁と在来犁とのズレ (図 26)

兵庫県では7世紀後半の政府モデルのコピー犁が3遺跡で出土している。梶原遺跡犁は一木犁へらの木部完形品、安坂・城の堀遺跡犁は一木犁へらの上部欠損タイプ、川除・藤ノ木遺跡は一木犁へら。これらのタイプは20世紀まで継承されたのかされなかったのか。

梶原遺跡は旧市島町、aはその西隣の青垣町の在来犁。bは安坂・城の堀遺跡のある中町の在来犁。cは中町の南隣で川除・藤ノ木遺跡に比較的近い西脇市の在来犁だが、いずれも一木犁へらの痕跡はなく、把手もトの字形把手ではなく直棒把手で似ていない。

図 27 在来犁は強運の生き残り

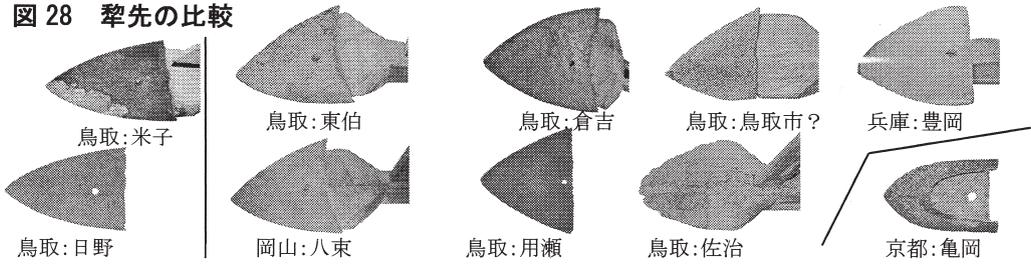


在来犁はサバイバル戦の勝ち残り (図 27)

在来犁の a, b, c とも政府モデル系の曲轆で a は転回用把手も継承。3台とも直棒把手でこれは朝鮮系犁からの継承、c の床幅犁頭も朝鮮系であり、3台とも古代からの遺伝子を継承していてこのタイプも7世紀にあったことになる。

古代・中世はと自然災害や疫病に無防備で慢性的な飢饉に戦乱が重なったため、多くの家系は途絶え、多くの犁が姿を消した。わずかに生き残った家系が平和で安定した近世以降に急速に子孫を増やした。その家の犁だけが残り、分家や婚姻で分布を広げた結果が、われわれの知っている各地の在来犁なのである。

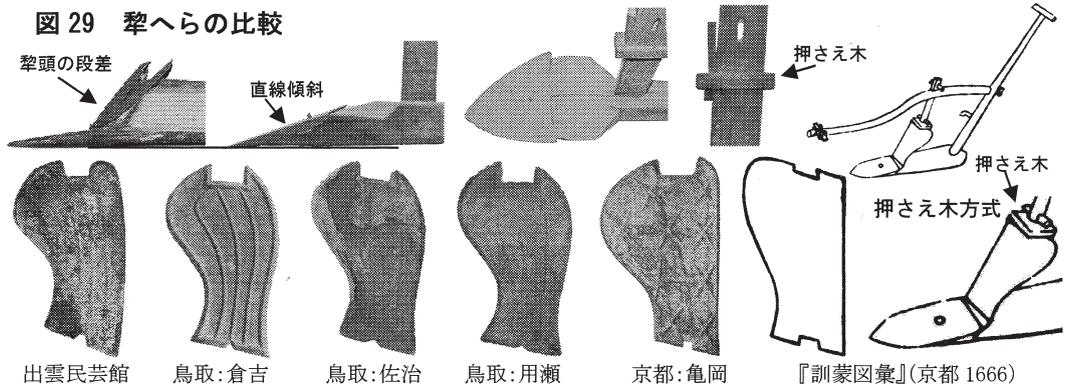
図28 犁先の比較



3-3 地域で異なる鑄造犁先・へらの開始時期

倉吉では6世紀から鑄造犁先? (図28) 鳥取県倉吉市の在来犁は犁へらは京都系の凹頭へらだが犁先は京都とは異なる大型三角犁先である。大型三角犁先は朝鮮系そのもので、5世紀後半～6世紀に鑄造技術者が渡来したときに在地首長は鉄材と資本を与えて鑄造工房を保護育成したのであろう。米子や日野は別系統で大型三角犁先は東伯以東、兵庫県豊岡も分布範囲のようだ。斎江鑄造所が操業していた倉吉市は分布域の中心であり、6世紀の鑄造工房の有力候補地である。

図29 犁へらの比較



京都・山陰間の密接な交流 (図29) 京都市・亀岡市から鳥取県佐治・用瀬・倉吉を経て島根県出雲市まで京都系の凹頭へらが使われてきた。犁柱に仕込んだ押さえ木で犁へらを固定する日本独自の方式で、山城辺りが発信源と推定される。この山城に平安遷都で都が移ったことで山陰道諸国にとっては都がずいぶん近くなった。

税の納入は郡役人に率いられた農民のキャラバン隊が都まで運ぶのが原則だが、西国は瀬戸内海を舟運で運ぶので早くから郡役人の付き添う業者輸送の形をとり、淀川を遡った淀の湊～京都間では牛車や駄馬の取り合い状況となった。これに合わせて冬は雪に閉ざされて二毛作のできない山陰地方の農民が牛を連れて都に輸送の出稼ぎに出た可能性があり、鎌倉時代の『松崎天神縁起』には京の北野天神の工事現場で材木を運ぶ牛車の背に鳥取起源の単橋鞍が描かれている。この牛を連れた輸送出稼ぎは9世紀には成立したと考えられ、彼らが京都の押さえ木方式の凹頭へらを持ち帰り、都への憧れを伴って山陰地方に広まったものと考えられる。こうした牛を介しての山陰地方と京の補完関係をきっかけに中国山地が京の車牛の供給地に成長していくのであろう。まだ未検証の仮説だが蓋然性は高いと思われるので、ひとまず提起しておきたい。

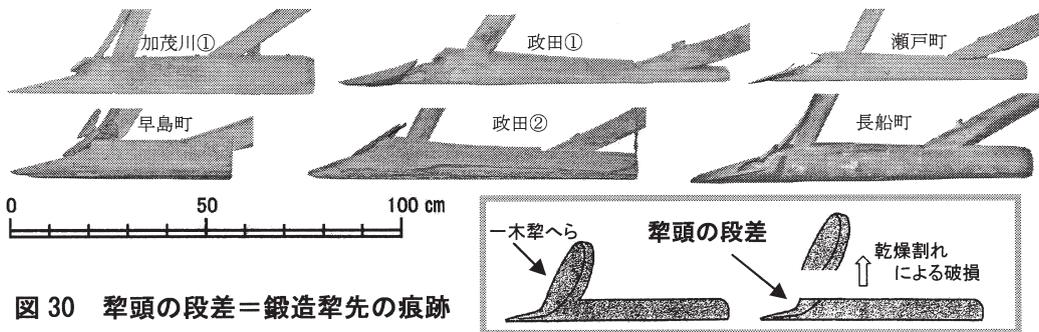
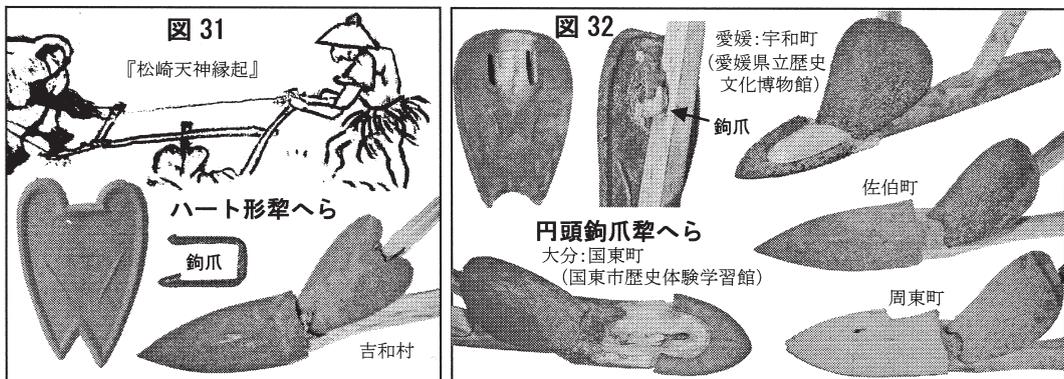


図30 犁頭の段差＝鍛造犁先の痕跡

吉備政権下は鍛造犁先（図30）吉備氏の本拠地にあたる岡山県の南部，倉敷市・岡山市から長船町までの長床犁には，犁先の根元と犁床上面の間に5cm前後の犁頭の段差がひろく認められる。心持ち丸太から削り出した一木犁へらは乾燥すると放射状にひびが入って割れやすく，欠損した破片や痕跡が出土犁にも見られる。一木犁へらが欠損したり太い材が用意できなかったり加工が難しく低くとどめた場合は，枠内に示したように犁頭の段差が残る。犁頭の段差が広く残存することからすれば，吉備では政府モデル犁が送付された662～3年段階でまだ鑄造犁先・鑄造犁へらは使われていなかったことになる。現在は中世以降の鑄物師の営業活動で鑄造犁先・鑄造犁へらに差し換えられているが，かつて一木犁へらだったことは痕跡に残ってしまうのである。



ハート形犁へら（図31）「ハート形犁へら」は凹頭へらを左右対称にした形で，下端は2つの突起を犁床上面の穴にはめて固定する。吉和村では鉄の鉤爪を上から掛けて留めているが本来は押さえ木方式であろう。今回の調査では広島県で使われていたが，鎌倉時代の『松崎天神縁起』（1311）に見られることからすれば起源は古く，山口県でも使われていたのであろう。

円頭鉤留め犁へら（図32）「円頭鉤留め犁へら」はやや小振りな犁へらで緩い曲面で，裏面に突き出した2本の鉤爪で犁柱を挟み，栓を打って留める。下端はハート形犁へらと同じく突起留め。この犁へらは広島県・山口県から大分県，少し幅広で愛媛県でも使われている。ただ鉤留めについては，広島県や大分県では犁柱となじまず釘留めやへら受け材を追加するなどミスマッチも見られることから，鉤爪犁へらは幕末・近代以降に新しく広まった可能性も考えられる。

### 3-4 県域はほぼ古代の地域文化圏

在来犁の形態や牽引法の分布の境界はほぼ県境と重なることが多く、明治の県域はほぼ古代の文化圏を踏襲していたという興味深い結論に達する。この点を〔図22〕で取り上げた牽引法を中心に見ていこう。

**山口県は首引き法** 中国でも朝鮮半島でも犁や馬鋤は牛の首木で引かせる首引き法だが、このアジア標準の首引き法を20世紀まで継承してきたのが山口県と紀伊半島である。紀伊半島では朝鮮半島外交で活躍した紀氏が通訳の確保から紀ノ川下流域のコリアタウンを保護、山口県では光市室積海岸の迎賓館の通訳の確保から大和政権が大型コリアタウンを保護したため、渡来人の首引き法が標準となったと考えられ、広島県の佐伯町・吉和村も首引き法である。

**残る4県は胴引き法** 中国地方の残り4県は鞍だけで引かせる日本独自の胴引き法である。日本では5世紀前半に馬鋤が導入されたが、当時牛はまだいなかったため軍用に導入されていた馬に引かせたため「馬鋤」と呼ばれるようになった、というか馬鋤という呼称からこの歴史が復原できたのである(河野1994a)。馬鋤に慣れた日本人集落では渡来人から犁耕を学んだ際にも牛の背に鞍を置いて引かせた。渡来人は首引き法で引かせたため6世紀段階では2種の牽引法が混在していたが、渡来人は少数派のため同化されて胴引き法だけが残ったのが4県である。

**双橋鞍と単橋鞍**(図33) 農耕鞍は荷鞍を小型化したもので2本のアーチが背をまたぐので「双橋鞍」と呼ぼう(河野1994b)。広島県・岡山県はこの双橋鞍だが、鳥取県は背をまたぐアーチは前枠だけという「単橋鞍」で九州中・北部にも見られる。単橋鞍は大化改新政府が送りつけた中国系の引綱渡し首木を鞍と勘違いして背中に置いたのが起源で、後ろに滑るのを防ぐため横木を出したのが「独橋鞍」、それに傷つけ防止の木片を取り付けたのが単橋鞍。九州の単橋鞍は横木が1本に対して鳥取県は3本で、たがいに没交渉で生み出された平行進化と考えられる。

**山枠と千木枠** 背をまたぐアーチは自然木の「山枠」が原型。木工職人が鞍を作るようになると角材を組み合わせた「千木枠」へと進化する。山枠双橋鞍は広島県、岡山県は千木枠双橋鞍で、千木枠双橋鞍による胴引き法は瀬戸内海を越えて香川県や愛媛県に広がる。

**牽引法と犁型** 中国地方でも犁型はさまざままで同じ県内でも複数の犁型は存在するのに対して、首木や鞍など牽引具は県域かそれを超えた数県範囲の分布圏をもつことが注目される。

古代では木製農具は自作が基本だが、首木や鞍は平場の農村では手に入りにくい曲がった木を使った小物である。そこで山間部の農家が農閑期の稼ぎに鞍や首木を製作して春先に牛の背に載せて売り歩くというような慣行が早くから成立していたのかも知れない。

図33 農耕鞍の形態分類

構造		双橋鞍	単橋鞍	独橋鞍
枠木の形	山枠	 山枠双橋鞍	 山枠単橋鞍	 山枠独橋鞍
	千木枠	 千木枠双橋鞍	 千木枠単橋鞍	 千木枠独橋鞍
起源		荷鞍を小型化		引綱渡し首木を間違っ て背中に置いたことから進化

図 34 中国地方の馬鍬の引手

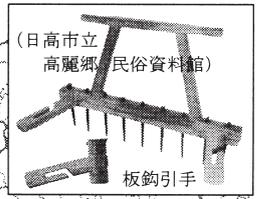
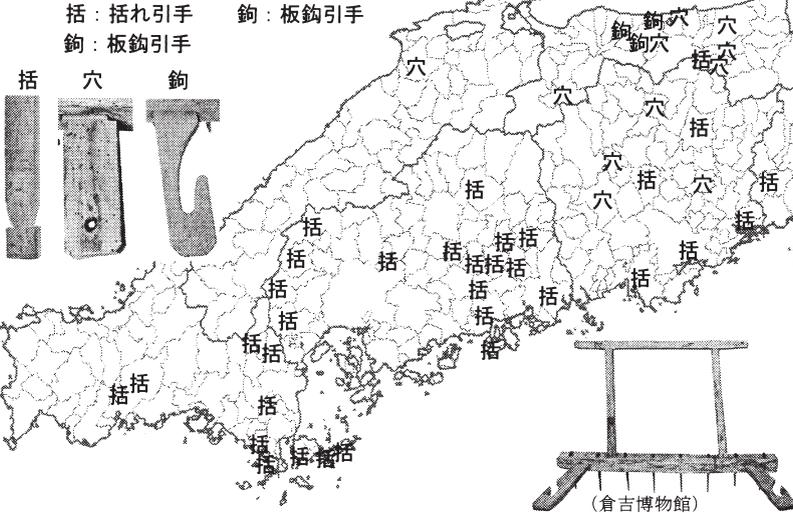


図 35 馬鍬の引手

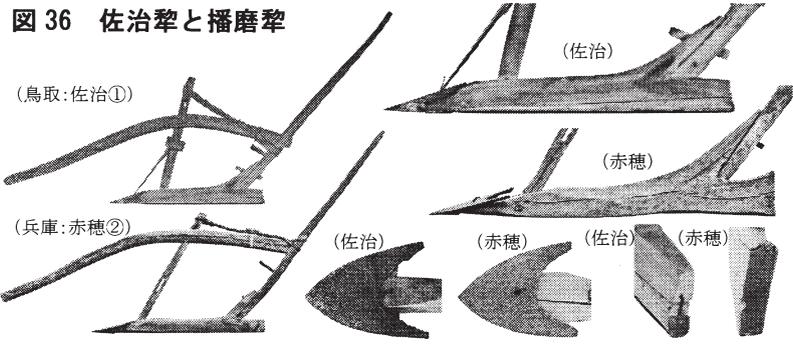
県名	市町村	括れ	縄穴	板鉤
山口	小郡町	○		
	山口市	○		
	本郷村	○		
	美和町	○		
	玖珂町	○		
	田布施町	○		
	平生町	○		
	大島町	○		
	橋町	○		
東和町	○			
鳥取	出雲民芸		○	
鳥取	日野町		○	
	東伯町			○
	倉吉市		○	○
	北條町			○
	治町		○	
	佐治村	○	○	
	河原町		○	
	鳥取県博			○
広島	佐伯町	○		
	吉和村	○		
	戸河内町	○		
	芸北町	○		
	八千代町	○		
	庄原市	○		
	世羅西町	○		
	世羅町	○		
	甲山町	○		
	上下町	○		
岡山	久井町	○		
	三和町	○		
	府中市	○		
	三原市	○		
	瀬戸田町	○		
	福山市	○		
	北房町		○	
	高梁市		○	
	倉敷市	○		
	加茂川町	○		
山	吉井町		○	
	鏡野町		○	
	津山市	○		
	岡山政田	○		
	備前市	○		
兵庫	上郡町	○		
	中町	○		

3-5 武士の移動の痕跡 (図 34, 35)

馬鍬の引手の分布を見ると「括れ引手」は西日本の標準型、「縄穴引手」はローカルなタイプに対して「板鉤引手」は中部・関東型である。

源頼朝による守護・地頭の設置、承久の乱の上皇方武士の所領の没収によって、多くの御家人が守護や地頭として西日本に赴任した。倉吉近辺に関東型の板鉤引手馬鍬が分布するのはその痕跡であろう。地頭に任じられても地元は猛反対、農具と下人を携え農場を開拓、自前で食糧を確保しながら腰を据えて支配にあたっていた厳しさが伝わってくる。

図 36 佐治犁と播磨犁



播磨の武将赤松氏の因幡進出 (図 36) 佐治村には播磨型の長床犁が混在する。直棒把手、柱柄縄締、枠内小把手、V字形犁先、縦板床とそっくり播磨型。15世紀後半の応仁の乱後、因幡の守護家山名氏の内紛に参与して播磨の赤松氏は因幡に出兵した(『鳥取県の歴史』)。その一部が佐治村に定着、子孫は農民となって20世紀まで暮らしてきたのであろう。

#### 4. 日本のなかの中国地方

これまで在来犁データから中国地方の歴史がどう描けるのかを見てきたが、では在来犁の全国比較からは中国地方はどう見えるのか、現段階で見えることをまとめておきたい。

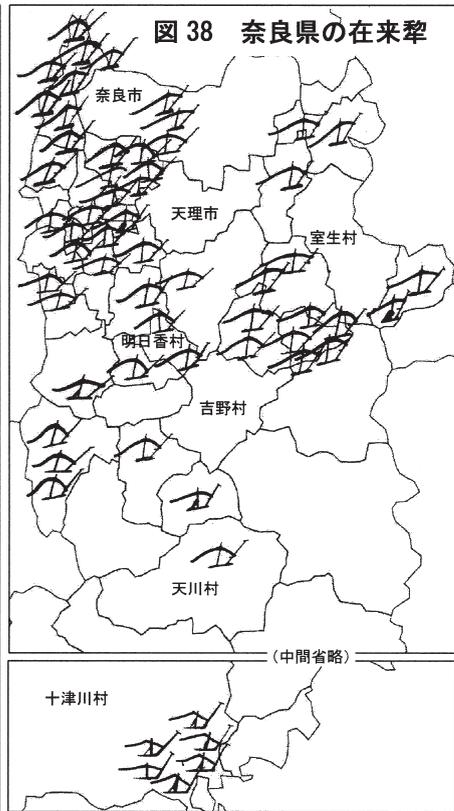
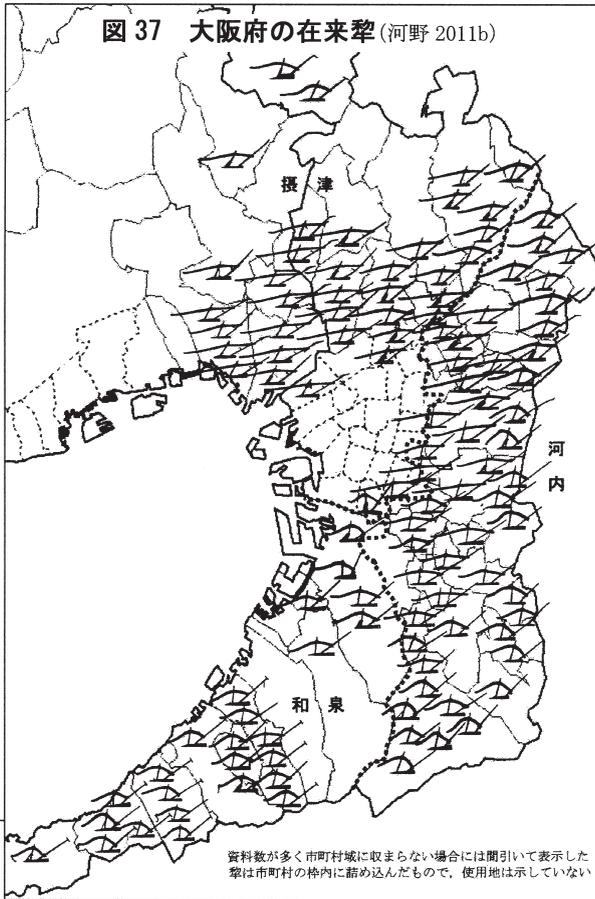
大まかな傾向からすれば畿内・西日本・東日本でそれぞれ特徴が見られる。日本の犁耕の初伝は5世紀後半～6世紀に渡来人が各地に牛と朝鮮系無床犁を持ち込んだことに始まり、7世紀後半の662～3年に大化改新政府が中国系の政府モデル長床犁を各地の評督（のちの郡司）のもとに送りつけコピーさせて普及を図った。この2つの契機が3地域の特徴を生み出すことになる。

**畿内は政府モデル犁が標準** まず〔図38〕で政権所在地の奈良県を見ると、一見して分かるように全域が曲轅長床犁、つまり政府モデル犁である。飛鳥のある奈良県はおそらく渡来人密度が全国一だったと考えられ朝鮮系無床犁が広く使われていたことは痕跡から証明できるにもかかわらず、在来犁は政府モデル犁そのまま。奈良県の豪族は大和政権の閣僚クラスを輩出していたので政府の政策はわが政策と受け止め、使い慣れた朝鮮系犁をあっさり捨てて政府モデル犁に全面的に乗り換えたものと考えられる。〔図37〕で大阪府を見ると、古市古墳群や百舌鳥古墳群を含む東南部は奈良県と同じ曲轅長床犁で政府モデル犁を素直に受け容れたのに対して、北西部には直轅長床犁が目立つ。ここからは大和政権の閣僚クラスは出なかったもので、渡来人文化が勝ってコリアタウンとなったのであろう。

**西日本は政府モデルと混血型** 〔図39〕で西日本を見ると、政府モデル犁の後裔もあるが、朝鮮系要素を残した直轅長床犁や三角棒犁など混血型が多い。すでに朝鮮系無床犁を使っていた地域では政府モデル犁を受け容れる際に使い慣れた朝鮮系犁の要素が残るので混血型となる。それに対して政府モデル犁のある地域は渡来人が来ていなかった地域であろう。犁耕処女地でも政府モデル犁を受け容れて犁耕を始めたのが西日本であり、中国地方もこのなかに入る。

**政策聞き流しありの東日本** 〔図39〕で東日本を見ると、北陸と長野は直轅長床犁、山梨と関東地方は三角棒犁が主流で畿内や西日本で見られた政府モデル犁系の曲轅長床犁がほとんどない。これはすでに犁耕をおこなっていた人々は政府モデル犁を受け容れて混血型が生まれたが、犁耕の処女地では政府モデル犁が定着しなかったことを示している。西日本では中央政府の政策の聞き流しなど考えられないことだったが、東日本では聞き流しありで、政府の影響力は地域社会には十分浸透していなかったことがうかがえる。東日本は畿内や西日本に比べて渡来人密度が低かったことと大化改新政府の政策の聞き流しもあって、明治を迎えるまで犁耕の普及率は相対的に低く、犁耕の西高東低傾向が見られた。

**東北地方は犁耕の空白地** 〔図39〕では福島県に在来犁があるが栃木県型で、平安時代以降の開拓移住で持ち込まれたと考えられる。新潟・福島以北は蝦夷の世界で政策が浸透しなかったのである。20世紀の在来犁分布には6～7世紀の情勢が反映していたのであり、『古事記』『日本書紀』が書いてくれなかった各地の庶民の歴史が在来犁にバックアップ保存されていたのである。



## おわりに

以上、古代の山陽道・山陰道に相当する中国地方5県と兵庫県西部と京都府西部の在来犁を駆け足で見えてきたが、未調査地が多いにもかかわらず、ある程度の傾向性は見えてきたと思う。七道諸国では鑄造技術が普及していなかったことを語る山口県の鍛造犁先も、7世紀の吉備氏が大和政権との蜜月時代を誇りに生きていたことを語る雄大は曲轆も、山陰地方に京都系の鑄造技術が定着していたことを語る倉吉の凹頭へらも地域古代史の痕跡であり、歴史遺産である。

犯罪者は証拠隠滅を図るが、農具は生きるための手段なので子孫に伝えようとするので1300年を経て現代まで伝えられてきた。『古事記』『日本書紀』は都の天皇・貴族の政治・外交関係の事件性のある事柄しか記録しないが、民具はそれと対照的に地方の庶民の日常の生産や生活の痕跡を遺伝子として伝えているのであり、そこに注目して広域比較から体系的に市町村ごとの個性ある古代史を復原するのが生まれたばかりの「民具からの歴史学」であり、文献史学・考古学とならぶ第3の歴史学なのである。現在民具は有形民俗文化財という位置づけがなされているが、民具は歴史資料であり、「有形歴史文化財」と捉え直す必要があるのではないか。

### [謝辞]

本稿のような調査報告はデータの提示で分量が多くなり大学紀要しか発表の場はない。『商経論叢』の投稿権は専任教員に限られていたが、私が退職する同じタイミングで退職後3年間の非常勤講師期間に限って投稿権を認めるとの規約改正がおこなわれたため、本稿の投稿が可能となった。経済学会の役員および会員みなさんに篤く感謝したい。また鳥取県史編纂室の樫村賢二氏、岡山県政田民俗資料館の安倉清博氏には調査のプランと案内をしていただいたおかげで多くの在来犁に出会えたこと、その他多くの方々にさまざまな便宜や写真提供をいただいた。記して感謝の意を表したい。

### [参考文献]

- 河野 1990 「周防のウナグラ」(1)(2)『民具マンスリー』23-2, 23-3  
 河野 1994a 「馬鍬の導入—古墳時代の日本と江南—」『日本農耕具史の基礎的研究』和泉書院  
 河野 1994b 「小鞍の開発—日本的牽引法の形成過程—」『日本農耕具史の基礎的研究』和泉書院  
 河野 2004 「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」『ヒストリア』188  
 河野 2007a 「日本の犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型」神奈川大学21世紀COEプログラム第2回国際シンポジウム報告書『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』  
 河野 2007b 「周防地方の民具から見た犁耕伝来の2つの波」『商経論叢』42-2  
 河野 2009 「奈良県の在来犁—大化改新政府の畿内向けモデル犁の復原—」『商経論叢』45-1  
 河野 2010a 「民具から見た日本への犁耕の伝来時期と伝来事情」『歴史と民俗』26  
 河野 2010b 「『民具からの歴史学』への30年」『商経論叢』45-4  
 河野 2010c 「近世農業と長床犁—「中世名主=犁, 近世小農=鍬」説の再検討—」(下-2)『商経論叢』46-1  
 河野 2011a 「大阪府の在来犁—民具からの7世紀の政権支持基盤の復原—」『商経論叢』47-1  
 河野 2011b 「大阪府の在来犁Ⅱ—渡来人の動向と泉南・紀北圏の復原—」『商経論叢』47-2

沢田幸治先生へ 長らくのお勤めご苦労さまでした。マルクス経済学理論がご専門の先生と同じ職場にしながら日ごろは校務に追われて、研究の接点での議論を交わせなかったのがちょっぴり淋しい思いです。でも研究は一生もの、これからもよろしく願いいたします。